

グロテスク～Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第七章



澄んだ夜の空気は静まり返り、遠くでフクロウがかすかに鳴く声だけが聞こえた。星空

薄暗い修道院の敷地を照らし、2階建ての寮の窓からは、いくつかの油灯の微かな光が漏れていた。中庭を挟んだ向かい側には、スタンドガラスの窓が並んでおり、こちらはまばゆいばかりに輝いていた。大聖堂はまるで生きているかのようだった。

輝く教会内部、そして頭上には、煤で汚れた精緻なフレスコ画がアーチ型の天井を飾っていた。その絵は、大聖堂の上部空間のほぼ全体に広がっていた。その下には、巨大な石柱が2列に並び、外壁近くに主翼の全長にわたって伸びていた。これらの柱は、空高くそびえ立ち、天井へと消えていくフライングバットレスを支えていた。

大聖堂の4つの翼すべてに同じ堅牢な設計が施されており、翼が接する部分、つまりそれらが共有する開放的な空間には、一段高いフード付きの祭壇が立っていた。

垂れ下がるタペストリーやドレープが、彫刻が施された木製の祭壇の天蓋を飾り、聖なる中心物は床の中央にある堅固な岩盤の上に置かれていた。祭壇の岩盤の両側には、石の土台から突き出た閉じた鉄の輪に結び付けられた太い革紐が置かれていた。

ブライジ枢機卿は一段高い祭壇の前に立ち、背の高い床置き燭台が彼の肩越しに揺らめく光を投げかけていた。彼は今やもろくなった紙の束の文章にすっかり没頭し、それをめぐりながら独り言を呟っていた。彼の目からは涙が溢れ、

彼はその後、外典のアーカイブから持ち去ったナラムシン訳のラテン語の箇所をめぐっていた。近くでは、修道士クロディウスとグレヴィルが静かに命令を待っていた。彼ら3人と、祭壇の石板の8つの金属の輪に何本もの長い革紐の最後の1本を結びつけるのに忙しくしていたグレイト修道士を除けば、大聖堂はがらんとしていた。

やがて、グレイト修道士がブラージに近づいた。「係留索はしっかり固定されています、修道院長。長いものから短いものへ、外側から内側へと繋がっています。」

ブラージは、使い古されたページから一瞬視線を外し、「それはどういう意味ですか？」と尋ねた。

グレヴィルはグレイトの発言を説明しようと前に出た。「祭壇の石の土台の両側には、4つのフックがあります。それぞれのフックにはロープが取り付けられています。すべてのロープは」

クロディウスはため息をつき、グレヴィルの話を遮ってブラージにもっと簡潔な説明をした。「祭壇の石板は床の二つの溝にはまっている。石板を均等に引き戻さないと、引っかかってしまうだろう。」

ブラージは眉を上げたが、書類から目を離さなかった。「もしそれが流行したら？」

クロディウスは答えた。「もし引っかかったら、紐を逆の順序で並べ直さなければならぬ。短いものから長いものへと並べ、それぞれの端を祭壇の反対側に交差させるのだ。それから、石板を完全に閉じてから、紐を逆向きに繋ぎ直さなければならない。」

再び開いて、

「難しいですか？手間がかかりますか？」

クロディウスは肩をすくめた。「ただ時間がかかるだけだ。床の穴を閉めて再び開けるのに必要な時間だけだ。」

ブラージは彼にこう告げた。「では、今度はあなたに、スラブが

「捕まらないんだ。」ブラージが続けると、クロディウスは身を硬くした。「もちろん、流産した場合は、お前たち二人に責任を問うつもりだ。」

クロディウスはあ然とし、グレヴィルの方を見た。グレヴィルはグレイトのかすかな笑みに眉をひそめていた。クロディウスは身をよじりながら咳払いをした。「閣下、もしよろしければ申し上げますが、石板が引っかからないという保証はできません。」

ブラージはゆっくりとページを下ろし、目を細めて彼の方を向いた。すると、クロディウスとグレヴィルは、枢機卿の鋼のような眉の下に、まるで悪魔そのもののような、冷たく、清らかで、決意に満ちた視線を見出した。ブラージの盲目の目は、まるで彼ら全員を一度に見通すかのように、彼らを貫いた。

クロディウスは慌てて視線をそらし、代わりに祭壇の方を見ながらブラージにさらに懇願した。「祭壇は一度も動かされたことはありません。私たちは、古代の修道院の記録をたどって調べていく。我々が成功すると想定するのは無理がある」

ブラージは彼の言葉を遮り、次第に苛立ちを募らせながら言った。「君たちは今、寮ではなく私の前にいる。それは君たちが私の信頼を得ているからだ。君たち二人は地下墓地の新しい管理人になりたいのだな？」

「ああ、まさにその通りです！」グレヴィルは叫び、「私たちは謹んであなたのお役に立ちます。」

クロディウスはグレヴィルを睨みつけ、こう答えた。「はい。しかし、もしあなたがお気に召すなら、

卓越性 』

「ならば、石板が引っかからないように気をつけろ、そうだ！」ブラージは怒鳴った。
クロディウスはため息をついたが、従った。「承知いたしました、閣下。」

突然、礼拝堂棟の外側の二重扉が開き、ボーン大尉が最強の兵士2個隊を率いて教会に入り、中央通路を進んでいくと、階段状に並んだ長い座席が区切られていた。百足の行進靴の足音が大聖堂の礼拝堂に轟いた。やがて隊長が停止を命じると、兵士たちはぴたりと動きを止めた。そして彼の声が教会の翼廊の広大な空間に響き渡ると、大聖堂には新たな静寂が訪れた。

ブラージ枢機卿と3人の修道院修道士は、ボーン大尉が近づいてくるのを見守っていた。キャプテンは彼らの手前で立ち止まり、頬を掻き、両手を腰に当てた。彼は緑色の探るような目で大聖堂を見回し、主に祭壇とそのロープ。それから彼は修道士たち一人ひとりと視線を交わした後、ブラージの方を向いた。「始めましょうか？」
ブラージはナラムシンの書物に再び目を向けながら、「まもなくお教えします、隊長。しかし、祭壇に関していくつか重要で、非常に重要な詳細事項があります。クロディウス修道士がこれからご説明いたします」と答えた。

クロディウスは合図を受けて前に進み出た。「ああ、はい、隊長」と彼は言った。修道士はボーンに、祭壇の石板を均等に引っ張ることの重要性を説明し、固定されない。クロディウスがボーンに求められることを説明する間、二人は祭壇の周りを3分近く歩き回った。修道士は続けた。「ですから、作業を始めれば、部下たちは互いに場所を争うことになるため、配置は非常に重要です。」ボーンは床に置かれた8本の長い紐を、石板から外側に向かって正確に蟻継ぎのように配置されているのを見た。「ご存じのとおり」とクロディウスは付け加えた。「祭壇を移動させる作業は少々複雑です。見た目以上に大変な作業です。とはいえ、98人の部下が必要です。それ以上でもそれ以下でもありません。さて、何人いますか？」

準備はいいですか？

「もう十分だ」とボーンは言った。
「確かに。」クロディウスは眉をひそめ、顎を高く上げた。「なるほど。」彼はボーンの頬にある醜い傷跡をじっと見つめた。
ボーンは身を乗り出してささやいた。「修道士よ、正義の眼差しには気をつけろ。さもないと、部下たちの前で面目を保たなければならなくなるぞ。」クロディウスはボーンの肩越しにちらりと見ると、彼をじっと見つめる二列の王室近衛兵の姿が目に入った。
「では、」僧侶はため息をつき、意気消沈した様子で背を向けた。「では、あなたの部下を手配しましょうか？」

「司祭よ、君の思うように配置してくれ」とボーン大尉は言い、伸ばした手をゆっくりと振りながら兵士たちを指差した。
クロディウスはブラージ枢機卿の方を見たが、枢機卿は頷いて承認しただけだった。

こうしてクロディウスは、革製のロープの上に兵士を8列配置することに忙しく取り組んだ。合計で40人が最も外側の2本のテザーを固定し、24人がその次の外側の2本を、20人がその次の内側のテザーを、そして14人が最も内側のテザーを保持した。ボーンは残りの部下、つまり配置されていない者たちを

聖堂の外、三つの入り口それぞれを守るための縄。すべて配置につき、準備は万端だった。そして、教会を包み込む静寂の中、クロディウスは八列の兵士の後ろに回り、祭壇の位置に対する各列の整列具合を点検した。最後に、彼は一歩下がって、修道士の方を見た。

グレートは遠くから様子を伺い、うなずいた。グレートはブラージ枢機卿にささやき、ブラージ枢機卿は書類から顔を上げ、手で合図をしてボーンに合図を送った。それに対し、ボーンは部下たちの方を振り返り、隊列を回りながら大声で命令を下した。「全員だ！」引っ張れ！すべての列が一斉に引っ張れ！すべての列がペースを合わせて 3カウント引っ張って、3カウント休む！」彼は彼らの後ろに立ち止まり、腰で両手を組んだ。「私の合図で！」ピンと張ったロープが緊張した。「引っ張れ！」

98人の兵士が力を込めた。8本の綱が軋んだ。それでも祭壇は神聖な場所を保っていた。ブラージはクロディウスを睨みつけた。グレヴィルは身をよじった。

「持ち上げろ！」兵士たちは再びロープに寄りかかり、6トンの岩が滑り落ちる軋む音が大理石の床に響き渡った。

「持ち上げろ！」そしてさらに数インチ。

「ゴーッ！」そして、さらに。

「もっと！」

「ひるめけ！」

準備万端で、まるで船の太鼓奏者が激しく漕ぐ漕ぎ手たちのリズムを刻むように、ボーンは自分のリズムを保っていた。

彼の兵士たちは、シューシューという音と呻き声の合唱だった。そしてボーンが新たな命令を下すたびに、石板からは、さらに汚れた床が現れた。ボーンの祭壇の反対側では、ブラージは長方形の穴が徐々に姿を現し、何十年もの間こもっていたカビ臭さが漂ってくるのを見た。やがて、深い穴が完全に露わになり、ドスンという音が響き渡った。

教会を通して。

「終わった」とクロディウスはブラージに告げた。「石板はこれ以上は進まない」。ブラージは開いた穴に向かって歩きながら、ボーンに合図を送った。

「解放しろ！」ボーンは叫んだ。兵士たちは拘束具を放し、汗が疲れ切った腕に光り、数人が床に倒れ込み、他の者たちは激しく息を切らしながら身をかがめた。しかし、ほとんどの男たちは背筋を伸ばし、頭を後ろに反らし、口を大きく開けて、天井に描かれた天使たちを見つめながら喘いでいた。

修道士のグレートとグレヴィルは、穴の汚れた外縁に背の高い床置き燭台をいくつか並べた。ブラージは明かりが灯った穴を調べた。深さ12フィートの穴は、幅16フィート、奥行き12フィートだった。その4つの壁はすべて黒い樹脂で覆われており、それは石炭灰の薄い膜が内側の表面に付着したように見えた。

使い込まれた暖炉の煙突。それでも、汚れの下にも、ブラージはどの壁の中央にも同じような特徴が刻まれているのを見つけた。十字架のエッチングで、それぞれに3つの同心円が中心を囲んでいる。しかし、彼を魅了し、心臓と呼吸を速め、気を失いそうになるほどだったのは、目に見えて焦げた穴とは別に立っていたものだった。

黒く光沢のある長方形の石が、くぼみの中央の床から突き出ていた。石のガラスのような側面は燭台の炎の光に反射し、高さ7フィート、幅5フィート、奥行き3フィートの、高度に磨かれたオニキスの塊のように見えた。しかし、それ以外は堅固なこの一枚岩には、石の最も広い面の中心を貫く、完璧で遮るもののない2フィートの穴が一つだけ開いていた。完全に、何列にもわたって彫刻された

その外面は幾何学模様の碑文で覆われており、大きく開いた穴の内側の湾曲した部分にまで及んでいた。

ブラージは心の中で、外典のスケッチと

目の前にそびえ立つ、正真正銘の遺物。すっかり魅了された彼は、片方の見える目にきらめきを宿しながら、穴の中を歩き回った。彼の視線は虚ろだった。おそらく、目の前にそびえ立つ高い石の扉を持つ地獄が確かに実在するという、あらゆる疑念や不信感を払拭する、驚くべき真実が徐々に明らかになっていく様子を表していたのだろう。

遠くからボーン大尉はブラージに呼びかけた。「他に何をすべきだろうか？」

「ああ、そうだ。そうしよう」枢機卿は門石の像に催眠術をかけられたかのように呟き、その間、亡くなった兄弟たちの記憶が彼の思考を捉え、彼の心を傷つけ、イングランド王エドワードに対する激しい憎悪を彼の中に掻き立てた。そして、その記憶と苦悩の瞬間に、彼はジャン＝ジャック・ブラージの魂の不朽の声を思い出した。その声は彼にこう語りかけた。「彼らは秘密を隠している。イギリス国王を滅ぼすための武器を。フランソワ、お前はこの武器を掌握しなければならない。彼に対してそれを解き放たなければならない。」

「それで？」ボーンは次第に苛立ちを募らせながら尋ねた。

ブラージは我に返り、指示を怒鳴りつけた。「グレイト修道士、船内に入ったら、視界を確保できるだけの明かりが必要だ。そして、お前も同行しろ。」彼はボーンの方を向き、

「私を船べりから降ろすために、ロープと数人の部下が必要だ。」

僧侶たちも兵士たちもそれぞれ忙しく働いていた。

まもなく、クロディウスとグレヴィルはブラージのそばに集まり、ブラージは今、ナラムシンのページ。枢機卿は振り返り、クロディウスに書類の束を託す前にこう言った。「これらの羊皮紙の重要性はご存知でしょう。ですから、丁寧に扱ってください。繊細なものですから。そして、絶対に落とさないでください。きちんと整理してありますから。」

「かしこまりました、閣下」クロディウスは彼からそれらを受け取った。飢えたような目で、もろいページをなぞり、古代の書物が自分の手の中にあることに驚きを隠せなかった。

ブラージは指示を付け加えた。「私が呼んだら、それらを私に渡さなければならない。」

ボーンは、穴に向かってロープを引きずる兵士の横を歩いていった。3人の兵士が彼に続いた。穴の縁で、兵士たちはロープを穴の側面から下ろし、ブラージを床下に降ろすのを手伝った。彼らの後ろでは、グレート修道士が7つの炎が灯った小さな燭台を持って急いでいた。急に立ち止まった彼は、穴の内側にこびりついた汚れの上でサンダルを滑らせ、危うく穴に落ちそうになった。彼はそこで、灯りを灯したまま縁にぶら下がり、ボーンは彼のロープの背中をしっかりと握りしめていた。隊長は彼を安全な場所に引き上げ、肩越しに「元気な司祭にしては、死を挑発するとは」と囁いた。

穴の中で、ブラージはサンダルを床に踏みつけ、繋がれた紐を放した。枢機卿はロープの前面についた汚れを拭き取ったが、頑固な煤は残っていた。彼は薄暗い周囲を見回し、下から「グレート修道士！松明を持ってこい！」と叫んだ。兵士たちはグレート修道士を穴の中に下ろすのを手伝った。ブラージは壁に近づき、上に向かって手を伸ばしてクロディウスに合図した。「私の羊皮紙をくれ。渡してくれ。」

クロディウスは汚れた床を自分のきれいなロープと比べてみた。そして、書類の束をグレヴィルに渡した。

「彼に渡してくれ」グレヴィルはクロディウスを睨みつけ、書類を受け取った。グレヴィルは汚れた穴の縁にうつ伏せになり、書類をブラージに渡した。ブラージは書類を受け取ると、クロディウスに声をかけた。「あなたは修道院の地下墓地を監督したいとおっしゃっていますが、そこもこの穴と同じくらい汚いのです。あなたの任命を再考した方が良くありません」クロディウスは唇をすぼめて、別の方向を見ただけだった。

穴の中に入ると、グレート修道士は腕を上げ、兵士の一人から燭台を受け取った。熱い蠟の滴が前腕の内側を伝って流れ落ちるのを見て、彼は顔をしかめた。

「明かりを持ってきてくれ」とブラージはゲートストーンに近づきながらグレートに呼びかけた。

修道士が門石の磨かれた表面を照らすと、枢機卿はそこに刻まれた無数の、それぞれ異なるものの判読不能な彫刻を調べた。それらはフランス語でもラテン語でもなく、当時の最も博識な学者でさえ知らなかった筆記言語のように、流れるような筆致で配置されていた。特筆すべきは、それらの彫刻は象形文字ではなく、幾何学的な図形であったことである。枢機卿ブラージは、かつて外典のアーカイブに隠されていた文書群の中から、これらの図形を後に認識していたのである。

ブラージはグレートにその場にとどまるように合図した。枢機卿はさらに後ずさりした。

ゲート石の正面から、彫刻の前にまっすぐに立った。

彼の目には、記号の流れがパターンを形成しているように見えた。円と線の列は、即座の発音を求める碑文の配列を示唆しているようだった。

しかし、ブラージが外典の書物にある同じ記号を何度も研究し、その音を口に出して発音し、そうなるほどまで研究した時と同じように、浮かび上がってきたのは、どうしてもできないという繰り返される苛立ちだけだった。彼は視線を落とした。

手元のページをめくりながら、ナラムシンという名のただの修道院の聖職者が、いかにしてこのような難解な碑文をラテン語に翻訳することに成功したのか、不思議に思った。

ブラージの書類がひらひらと舞い、グレートの炎が涼しいそよ風に揺らめき、その風は突然彼らのサンダルを履いた足元に吹きつけた。彼らは一斉に上を見上げると、クロディウス、グレヴィル、ボーンが自分たちを見下ろしていることに気づいた。ブラージは彼らを下がらせ、ゲートストーンに向かって歩み寄った。彼は首を傾げ、その穴から覗き込んだが、見えるのは薄暗い、遠くの穴の壁だけだった。彼は指先をゲートストーンの表面に当てると、思いがけず冷たかった。彼は再び元の距離まで後退し、顎を撫でながら、考えにふけりながら、その巨石をじっと見つめた。

ボーンは、募る苛立ちを伝えるかのように、わざとらしく咳払いをした。ブラージは、その音に目もくれず、「これは遊びではありません、大尉。物事には慎重さが求められるのです」と答えた。

ボーンは息を切らし、両手を腰に当てて、穴の縁の近くを行ったり来たりした。「これは「まったく、愚かな岩だ」と彼はぶつぶつ言った。

その時になって初めて、ブラージはさりげなくボーンの方を向き、目を細めた。「岩？それが君の推測か？」

ボーンは「岩だ」と断言した。

ブラージはグレートに羊皮紙の束を渡し、ボーンが立っている真下の穴の床に近づき、彼に向かって「ほんの少しの間だけでも、あなたの短剣を貸していただけませんか？」と声をかけた。

ボーンは腰に下げた鞘付きの骨柄の刃物を握りしめていた。「なぜだ？」

「せっかくなので、あなたが簡単に『ただの岩』と呼ぶこの物体について、少しお話したいと思います。」

グレヴィルは隊長から少し離れたところに立ち、クロディウスの耳元に顔を近づけて、「彼は神の家に武器を持ち込んでいる！」と囁いた。

ボーンは刀を鞘から抜いた。親指で、磨き上げられた刀身に付着したイヴァンの血痕をかすかに拭き去った。クロディウスは、聖なる教会の敷地内にナイフがあるのを見て、目を細め、顎を食いしばったが、何も言わなかった。ボーンはブラージに頷き、「よろしい」と同意し、それを穴に投げ込んだ。短剣は枢機卿の傍らの床にガチャンと音を立てて落ちた。「聖なる石を削って、その魔力を見せてみる。」

ブラージはナイフを拾い上げながら首を振った。「ああ、傷つけるつもりはない。だが、この刃で君の注意を完全に引きつけられるかもしれない。」彼は一歩下がってゲートストーンに近づき、軽く頭を下げて中央の穴にナイフを投げ入れた。

ボーンは穴の向こう側から短剣が落ちる音を耳を澄ませた。何も聞こえない。まるで消えてしまったかのようだった。彼は穴の周りをぐるりと回ったが、穴の底にナイフは見当たらなかった。クロディウスとグレヴィルも困惑しながら後を追った。最後にボーンはブラージにこう告げた。

「陛下の宮廷では、もっと素晴らしい魔法の技を見たことがあります。」さて、もしよろしければ、私の刀を返してください。

ボーンの短剣が彼に向かって突き刺さると、瞬時に大聖堂の天井に閃光が走り、シャツの左袖を切り裂き、ブーツのつま先を貫いた。

石の床にしっかりと突き刺さる前に、ボーンは尻もちをついた。ブーツはまだ床に固定されたままだった。彼は足の指の間に刺さった短剣を見た。柄には薄い霜が付着していた。破れた袖を調べると、前腕に細い赤い線が浮かんでいるのが見えた。それから教会の天井を見上げたが、そこには天使と悪魔の戦い、そして泣き叫ぶ王たちの壁画しか見当たらなかった。

クロディウスとグレヴィルは眉をひそめ、口をぽかんと開けて、倒れた刃を見つめていた。

ブラージは穴の陰に立っていて、穴の外で何が起きているのか全く気づいていなかった。

彼はボーンにこう答えた。「残念ながら、お返しすることはできません、大尉。その刃はもう残っていません。」

ボーンは短剣の先端を折ってブーツから引き抜き、足元でぶつぶつと呟いた。

息を切らしながら、「もう一度やってみろ、お前が枢機卿だなんて忘れてやるぞ」と言った。兵士が駆け寄ってきて手を差し伸べた。ボーンはそれをつかみ、兵士は彼を急いで立たせた。それから隊長は鈍い短剣を鞘に戻しながら兵士にささやいた。「アーモンド軍曹、今は兵士たちを鼓舞する時だ。私が何を期待しているか分かっているだろう。さあ、やってくれ。急げ」アーモンドは軽くお辞儀をして大聖堂の扉に向かって駆け出した。ボーンは天井を見上げながらアーモンドに呼びかけた。「それから私のヘルメットを持ってこい！」アーモンドは立ち止まり、もう一度軽くお辞儀をしてから走り去った。

グレヴィルはブラージに「刃がここに落ちた！」と告げた。

ボーンは用心深く穴の縁に近づくと、腕を組んで見上げるブラージを見つけた。「まだ岩ですか、隊長？」しかし、ボーンは不安げな視線を向けるだけだった。ブラージは振り返り、クロディウスに指示した。「祭壇の紐を逆にして、隊長の兵士たちを石板の反対側に配置して穴を再び封鎖するように。」クロディウスはうなずいて一歩下がったが、立ち止まってボーンに承認を求めた。ボーンはうなずき、不機嫌そうに手を振って彼を下がらせた。こうして、グレヴィルは紐の位置を変え、クロディウスは兵士たちを整列させた。

穴の中では、ブラージ枢機卿は門石に目を向けていた。そして、クロディウスがグレヴィルが逆さまにした縄にボーンの部下を最後まで配置すると、枢機卿はグレイトからナラムシン訳を取り出し、門石の顔全体が見えるように、書かれた詩句が読める高さに燭台をちょうどよく持つように修道士に指示した。突然、兵士のくしゃみの音が大聖堂の内部に響き渡り、ブラージはボーンを見上げた。「静かにしろ、隊長。」

ボーンは部下たちに指示した。「物音一つ立てな！」

不穏な沈黙が続き、ブラージの明瞭で落ち着いた声だけがそれを破った。

彼は手に持ったページから朗読を始めた。「お気に入りの士官候補生の声を上げて、中心窩のテネビトゥル・ラケウオを説明してください」

ブラージが門石の周りを歩き回り、ナラムシンのラテン語の詩を声に出して読んでいた間に、時間は過ぎていった。フライヤー・グレートは彼の袖にぶら下がり、燭台は高く掲げられていた。やがてブラージは歩き回のをやめ、一枚岩に向き合った。そして、選ばれた詩の最後の一節を朗読した。「一形作られ、窪みがあり、表面には漆が塗られ、そこに住まうのは大地である。」それから彼はページを下ろし、石をじっと見つめた。1分が過ぎ、2分が過ぎた。ついにブラージとグレートは前に進み出て、変わる事のない彫像の顔を調べた。

3分目の沈黙が過ぎた頃、ボーンはブラージに呼びかけた。「閣下、幽霊の軍勢が見えるふりをしましょうか？それとも、あなたの石は

「道化師が私の剣で仕掛けたトリックの後、その魔法はどうなるのか？」

ブラージは顔を上げ、ボーンのかすかな笑みに気づいた。「キャプテン、あなたの人生は、この石に比べればほんの一瞬に過ぎません。」

ボーンは腕を組み、鼻で笑って答えた。「君の人生と同じように、

「小石だ。」兵士たちはくすくす笑った。「静かにしろ！」彼は彼らを叱った。

クロディウスとグレヴィルはボーンとその部下たちから少し離れたところに立ち、二人の修道士は静かに話し合っていた。

「告白しなければならぬ」とグレヴィルはクロディウスにささやいた。「私が上級評議会の司祭として過ごした長年の間、そして石に関する記録や描写をすべて読んだにもかかわらず、この祭壇の下にそのようなものが本当に存在するとは、一度たりとも信じる事ができなかった。

彼らは信仰を持っているふりをしていただけだった。そして、上級評議会の修道士たちのほとんども、厳しい叱責を恐れて、私と同じように感じ、同じことをしていたと私は確信している。

「これで分かった」とクロディウスは答え、穴の方を指差した。

「しかし、あなたは本当にそれが存在すると信じていたのですか？私たちの修道院がそのような石を守っていたと？」

クロディウスは顎を高く上げた。「確かにそうしました。」彼はそう言ってから咳払いをした。

「しかし、私は写字室のスケッチとは異なるように見える石を集めたのです。」

「どういうことですか？」とグレヴィルは尋ねた。

クロディウスは腕を組み、顎を指で撫でながら考え込み、それから答えた。

「まあ、石の描写はあまりにも完璧すぎるように見えた。神のみぞ知る、

しかし、私はそれをよりありふれたもの、つまり別の時代の原始的な遺物として捉えたのです。彼は遠くを見つめながらグレヴィルを指差した。「それどころか、イングランドのあの大きな立石、あの古代の石に似ているように思えたのです。」

石が円形に並べられています。もしご記憶があれば」

「ああ、あれですね。ええ、覚えていますよ」とグレヴィルは床の方を指差しながら答えた。

それから彼はクロディウスの方を向いた。「では、黒い瞳を持ち、無防備な男たちに罪深い誘惑を仕掛ける、石の女の亡霊についてはどう思う？ヴォニグ修道院長や他の者たちが主張するように、彼女は実在すると思うのか？彼女はグロテスクの母だと？」

クロディウスは、グレヴィルの質問が突然苦痛になったかのように顔をしかめた。「どうして

彼女を疑うことができるだろうか？彼女は実在するだけでなく、肉体を持って現れるのだ。冷たく青白い姿をしているが、君や私と同じように生きている。グレヴィル、私の言葉に耳を傾けなさい。グロテスクの母なる悪魔は紛れもなく実在するのだ。」

グレヴィルは首を横に振った。「修道院に長年いるが、彼女の気配は全く感じない。他の人が言うように、夢に見たこともない。」彼は眉を上げてクロディウスの方を向いた。「君は彼女を見たことがあるか？」

クロディウスは息を呑みながら、危うくむせそうになった。「グレヴィル、私の信仰を疑うようなことは決して許さない！私に対しては言葉遣いに気をつけろ！」

「いや、まさかあなたが いや、そんなことは考えもしなかった」とグレヴィルは叫んだ。「ただ、あなたが彼女を目にしたことがあるかどうか疑問に思っただけだ。許してくれ。」クロディウスは目を丸くして、大聖堂の暗い方角を見渡した。おそらく、彼が完璧に思い出したあの霊を探していたのだろう。グレヴィルは咳払いをして、急いで穴の周りを回るボーンに目を向けた。

ボーンは穴の縁近くにひざまずいている二人の兵士に近づいた。二人の間には、巻かれた革縄の端が垂れ下がっていた。彼はそのうちの一人の肩を軽く叩いた。

「穴から紐を引き抜き、その端に輪っかを取り付けてください。枢機卿が引き上げを命じたときに足が入るくらいの幅の輪っかです。」足音が次第に大きくなり、隊長は注意を大聖堂の礼拝堂に向けました。そこでは、軍曹のアーモンドと兵士の一団が隊長の方へ急いでいました。軍曹は予備のヘルメットとともに、両手にそれぞれ準備の整ったクロスボウを携えていました。彼に続いていた4人の兵士はクロスボウを1つだけ携えていました。全員が平らな、革製の矢筒にボルトを詰め、太ももに括り付けていた。

祭壇のロープの上に立っていた98人の兵士たちは、アーモンド軍曹と彼の武装した小隊を見つけると、不満げに目を丸くして、互いにぶつぶつと文句を言い合った。彼らは皆、何をすればいけないかを知っていた。持ち場を放棄したり、命令に背いたりすることは、許されない、取り返しのつかない行為となる。そのため、兵士たちの雰囲気は一変した。隊長がより慎重に行動し、不服従に対してより重い刑罰を科す理由を見つけたときには、いつもそうだった。

クロディウスはボーンに近づき、彼を叱責した。「隊長、あなたの剣は許されますが、これらの男たちはクロスボウを持っています！ここは神の家です！あなたはそれを許すことはできません。」

ボーンはくるりと振り返り、クロディウスとグレヴィルに指を鳴らした。二人は歩みを止めた。「お前たち二人！」彼は大聖堂の奥の壁、巨大な石柱のペアを指さした。「あそこの柱の向こうの壁際に陣取れ。流れ矢に当たらないようにな ももちろん、偶然にでもな。」ボーンは二人を睨みつけた。

クロディウスは隊長の遠回しな脅しを考えて顔をしかめた。二人の修道士は慌てて立ち去り、柱の列を通り抜け、壁に掛けられた大きな石彫りのイエスの十字架の下に場所を奪い取った。そして彼らは

腕を組んで、考え込んで立っていた。

ボーンはアーモンドの方を向き、予備のヘルメットを取り出した。ヘルメットを被りながら、彼はクロスボウ兵たちにささやいた。「私が何を期待しているかは分かっているだろう。例外はない。だが、

司祭に危害が及ぶ場合、もしあなたがたのうちの誰かが枢機卿に危害を加え、彼の羊皮紙を奪ったら、お前の足を切り落として犬の餌にしてやる。」

ボーンは彼らの目をじっと見つめ、弓兵たちはそわそわしたが、軍曹は動じなかった。隊長は、礼拝堂の入り口近くの遮るものがない場所を指さしながら、軍曹に言った。

「そこに正確に兵士を配置せよ。」

「はい、隊長。」アーモンドは軽くお辞儀をし、部下たちに言った。「ついて来い。」

ボーンはアーモンドが兵士たちを率いて去っていくのを見送り、一瞬のうちに、かつての野心に満ちた自分に似ているように見える、若く経験豊富な軍曹のことを思い浮かべた。

しかし、祭壇のそばにいた98人の兵士たちは、アーモンドと彼のたった一隊のクロスボウ兵を全く違った目で見ている。彼らは、軍曹が小さな隊列をひざまずかせ、武器を構え、まっすぐ自分たちに狙いを定めたのを見ている。

彼らは、彼が弩兵たちに指示を与えながら、98人の兵士たちの頭上を指差す様子をじっと見守っていた。彼は大聖堂の3つの入り口それぞれを指さし、配置についた部隊の背後を回り込み、跪いている弓兵たちの背中に弩を向け、ボーン隊長に頷くのを見ている。同様に、隊長も信頼する軍曹に同じように頷いて応えていた。しかし、彼らはその手順をよく知っていた。そして98人の兵士たちは、与えられた命令にすべて従うよう、すっかり励まされていた。

「動いている！」穴の中からグレイトの声が響いた。ボーンは詳しく調べるために穴に近づいた。

窪みの中で、ブラージは門石の彫刻された面に燭台を近づけているグレイトに近づいた。死のような静寂がしばらく続く中、修道士は「あそこだ」と囁いた。グレイトはガラスのような黒い表面、高く掲げた燭台の高く静止した炎の映り込みを指さした。「炎の反射像が見えますか？どのように曲がっているか？」風は吹いていないのに、グレイトは窪みの空虚な空間を満たすかのような突然の寒さに身震いした。彼はちらりと見た。

彼が肩越しに振り返ると、穴の壁面は水滴で完全に光り輝いており、その水滴は汚れた表面に突然凝結していた。

「じっとしている」とブラージは怒鳴った。彼は指先でゲートストーンの冷たい表面をなぞった。それはしっかりと立っていた 実に堅固だった。しかし、それでもなお、燭台の炎の光の像は揺れていた。まるで炎の鏡像が波立つ水面を通り抜けているかのようだった。「確かに揺れている」とブラージはつぶやき、表面をさらに注意深く調べた。それから彼は身を引いて、慌てて数歩後ずさりした。

ゲートストーンから。「これは何だ？」

より安全な距離から、ブラージとグレートは、ゲートストーンに刻まれた碑文が次々と消えていくという、不自然な出来事の展開を目撃した。右から左へ、上から下へ、刻まれた記号の列が次々と洗い流され、その代わりに、黒く輝く滑らかな石の表面だけが残った。そして、すべての碑文が視界から消え、ゲートストーンすべての面が黒いガラスのように滑らかになったとき、虹色に輝く氷の結晶のこのようなシートが扇状に広がり、

今や霜で覆われた像。空気に残っていた冷たさは、突然厳しい寒さに変わり、司祭たちは互いの息に霧がかかっていることに気づいた。彼らは急に穴の壁際に退き、かつては硬直していた門石の表面が、まるで氷に覆われた塊全体が同時にあちこちで呼吸しているかのように、上下に揺れ動き、膨張と収縮を繰り返すのを見守った。サンダルの下では、低い轟音が徐々に高まる振動を伴い、二人は顔を赤らめ、緊張した表情を交わした後、震える床を見回した。

穴の外、遠くの大聖堂の壁にもたれかかるように、クロディウス修道士は多くの巨大な柱。腕を組み、気取った態度で、彼はグレヴィル修道士にこっそりと不満を漏らした。「修道院長の書斎で、枢機卿は自らあなたと私を補佐役に選んだ。まさに今この瞬間、私たちはそこにいるはずだったのに、

「猥下と共に、穴の中にいるべきだ。」クロディウスは首を振った。「正直に言うと、私がグレート修道士の代わりにそこにいるべきだ。私は彼よりも石についてずっと詳しいのだ！」彼は鼻を鳴らした。「だが、私たちはここで壁にもたれかかり、何の意味のある出来事からも離れて、みすばらしい従者の少年二人のように立っている。」彼は明らかに嫌悪感を露わにして顔をしかめた。「それに、あの隊長は誰よりも私の忍耐力を試す。」クロディウスはため息をつき、肩を柱にもたせかけた。「よく聞け、グレヴィル。もし私がそれほど注意深く思いやりのある人間でなかったら」

クロディウスは顎を食いしばり、自分が寄りかかっている柱を見上げた。彼はそっと彼は片手を柱に当て、次に両手を当て、それから耳を当て、頭を柱に押し付けながら言った。「グレヴィル、この柱に手を置きなさい。グレヴィル？」クロディウスは肩越しに振り返ると、グレヴィルが最初に思ったよりもずっと遠くに立っていることに気づいた。グレヴィルは教会の壁にもたれかかり、片手を上げて壁に取り付けられた十字架の台座に軽く触れていた。

「急げ！」クロディウスはグレヴィルに手を振った。

しかしグレヴィルは壁から離れなかった。「動くぞ！」と叫び、腕を下ろして彫刻を指差した。クロディウスは柱から離れ、彼に近づいた。グレヴィルは十字架の方向に向かって耳を当て、クロディウスにもっとよく聞くようにと身振りで示した。

「震えているのが聞こえるか！」クロディウスは身を乗り出し、頭を傾けると、像が壁の石にぶつかって振動する、かすかで素早いコツコツという音が聞こえた。

「柱も揺れています」とクロディウスは肩越しに先ほどまで立っていた柱を見ながら答えた。すると二人の神官はすぐに柱を注意深く見渡した。

床。

グレヴィルは言った。「壁も、柱も、そして今度は床も もしかしたら教会全体が震えているのかもしれない？」

クロディウスは天井のフレスコ画に視線を向け、眉間にしわを寄せながら「これは良くないな 壁画にとって」と呟いた。

クロディウスは、広大で高い位置にある絵画を調べた。その中央、大聖堂の祭壇のはるか上に、3人の王の全身像が、青みがかった炎の輪に囲まれて描かれていた。リングのさらに外側、そしてリングを完全に囲むように、剣、盾、胸当て、兜を身に着けた天使たちが戦う姿が描かれていた。まるで空中軍のように、これらの天使たちは、翼を持つ悪魔の集団から三人の王を守っているように見えた。その悪魔たちは皆、大聖堂の外側屋根の上層テラスに並ぶ様々な石像と同様のグロテスクな特徴を持っていた。

グレヴィルはクロディウスにささやいた。「教えてくれ。もし彼が自称するような人間ではなく、悪と結託していたとしたら、どうなるんだ？」

クロディウスは顔をしかめてゆっくりと振り返った。「それで、あなたは誰のことを言っているのですか？」

「枢機卿が！」グレヴィルは叫んだ。「もし彼がイギリス人に対して精霊を呼び出す以上のことを企んでいるとしたら？もし彼自身が悪魔で、ただ石を開けるためだけに修道院に来たとしたら？」

クロディウスは後ずさりした。「正気を失ったのか？異端を唱えるな！天の名にかけて、彼はアヴィニヨンの枢機卿だぞ！」

グレヴィルは続けて言った。「私は下級修道士ですが、彼が朗読した箇所には馴染みがありません。あなたは覚えていますか？」

クロディウスはグレヴィルの顔に近づき、彼を叱責した。「彼はただの評議会修道士ではなく、評議会枢機卿だ。しかも、石碑の完全な翻訳を手に行っているのだ！」

彼はゲートストーンに関して、私たち二人よりもずっと詳しいのではないか？

「それでも」グレヴィルは彼に問い詰めた。「彼が朗読した箇所の中で、何かご存知の箇所はありますか？」

クロディウスはグレヴィルの腕をつかみ、大聖堂の床が振動している原因を耳元で唸るように告げた。それは教会の外を疾走する馬のせいだった。それからクロディウスはグレヴィルを解放し、脅迫した。「私の忍耐を試すな！新修道院長に関するお前の異端的な非難はもう聞きたくない。さあ、正気を取り戻せ。さもなければ、お前は我々二人とも地下墓地の監督官としての正当な地位を失うことになるぞ！」

グレヴィルは不機嫌そうなため息をついてクロディウスを追い払い、視線をそらした。叱責された修道士は腕を組み、祭壇の手綱を握る兵士たちを睨みつけた。兵士たちは震える床を見つめていた。何人かは心配そうにささやき合い、兵士たちは落ち着きなくそわそわし、隊列全体がわずかに揺れ動いた。

ボーンは3人の兵士と共に穴の縁近くに立ち、緊張した兵士たちを厳しく睨みつけ、彼らに向かって叫んだ。「静かにしろ！口を閉ざせ、さもないと

次の男は私の鞭打ち台まで素敵な情熱を燃やすだろう！」彼は振り返った。「アーモンド、準備しろ。武器を構えろ！」彼はくるりと向き直った。「お前たちは皆、私に注意を向けろ。互いではなく、床でもなく、司祭でもなく、私だけを！」100人近い兵士は、静止した彫像のように凍りつき、その視線は隊長に釘付けだった。その時、唯一目に見える動きがあったのは、ボーンのブーツの真下、穴の床の上だけだった。

穴の中で、ブラージ枢機卿は壁際まで後退し、ぶら下がっているロープを探したが、見つけたのは結露で覆われた、滑りやすく冷たい表面だけだった。フライアー・グレイトは、紐を探しながら燭台を壁のきらめく光沢の上で動かした。すると、燭台の炎はたちまち壁から離れ、ゲートストーンの方へ。グレイトは頭を上げ、穴の上縁を調べたところ、彼が持っていた光と同じように、すべてのろうそくの炎が周囲の床置き燭台も同様に、穴の中央に向かって傾いていた。

「船長！テザーが！」ブラージはロープについての黒い汚れを拭き取りながら小声で文句を言い、叫んだ。それから肩越しに膨らんだゲートストーンをちらりと見た。「さあ、どうぞ！」兵士が急いでロープを下ろし、ボーンはブラージに「テザーの輪の中に足を滑り込ませろ」と指示した。ブラージがロープを掴んだ時

「シューッ！」耳をつんざくような突風が突然鳴り響き、火山噴火口が破裂するような絶え間ないシューという音が響き渡った。二人の司祭は身を投げ出した。壁にぶつかった。火格子の燭台が火床に当たり、炎が消えた。ブラージはナラムシン訳を失くし、ページの束は散らばってしまった。彼は慌てて床を這いずり回り、四つん這いになって散らばったページを拾い集めた。しかし、門石とその中央の穴（今は塞がっている）に用心深く目を向けていた。渦巻く黒い霧とともに。渦巻く暗闇は、濃い雲となってゲートストーンから溢れ出す前に、もくもくと立ち昇った。ブラージは最後のページをつかみ、飛びついた。濃い霧が坑道の底を覆い、その完全な暗闇で彼の足元を隠したとき、彼は壁に向かって立っていた。まるで坑道の底全体が消え去り、漆黒の影に完全に飲み込まれてしまったかのようなようだった。

ブラージは、煤で黒くなった氷の板が壁を滑り落ちるのを見て、ロープを掴んだ。彼はサンダルを脱ぎ、ロープの端の輪と格闘しながら、必死に足場を探した。黒い霧が腰の高さまで立ち昇った。「引っ張って！神様！助け出して！」彼はナラムシンのページを歯でくわえ、ロープを握りしめた。グレイトは、刺激性の煙の中を大股で進みながら叫んだ。「燃える！火だ！」上からボーンの声が聞こえた。「お前たち二人、テザーを引っ張れ！お前はもう一人連れてこい！動け！」

「今だ！」ブラージは歯を食いしばって叫んだ。兵士たちは彼の足に血豆ができ始めたが、彼を穴から引き上げ始めた。グレイトはブラージの上に飛び乗り、

突然の重みで、二人の兵士のうち一人が悲鳴を上げながら穴に真逆さまに落ち、不快な音を立てて霧を突き抜けた。残りの兵士は、滑り落ちたロープが手のひらの内側を焦がし、叫び声を上げた。二人の司祭は一緒に腰の高さまである霧の中へと滑り落ちていった。

「くそっ、枢機卿め！」ボーンは倒れた兵士の代わりにテザーを掴みながら叫んだ。彼はさらに6人の男を呼び寄せた。「このテザーで！今すぐだ！」足がもつれ

そして、ブラージがグレートを突き飛ばしたのと同時に、ロープがぴんと張った。

司祭はよろめきながら後ろに倒れ、立ち込める霧の中に消えた。ブラージはロープにつかまり、一人で穴の壁を滑り上がった。兵士たちは彼を安全な場所へ引き上げながら、もう一本のロープを穴に投げ入れた。ブラージは仰向けになり、太ももを掴んだ。服の押し付けた部分から黒い染みが染み出していた。彼は痛みで体を硬直させ、歯を食いしばったままページを咥え、息を荒くした。一人の兵士が彼の上にひざまずき、ロープの裾に手を伸ばした。

「触らないで！」ブラージは顔をしかめて叫んだ。

クロディウスは遠くから叫んだ。「どうしたんだ、隊長？ グレート修道士をそこから連れ出せ！ 彼は死ぬぞ！」

ボーンはくると振り返り、アーモンドに向かって「動いたり話したりしたら、彼を放せ、クロディウスを指さしながら、「もしあの男がせ！」と叫んだ。

穴の中にいたグレートは、なんとか立ち上がった。よろめきながら手探りで歩き回り、咳き込み、胸まで均等に立ち昇る腐食性の霧で視界を奪われていた。

ボーンは怒鳴った。「役立たずの野郎どもめ！あいつは目が見えないんだ！あのロープをもっと近づけろ！渡せ！彼は兵士たちからロープを引っ張り、穴の縁をぐるりと回り、それを穴の中に投げ込みながらグレートに叫んだ。「こっちだ！そうだ！ロープのところまで行け！そうだ！そのまま来い！俺はここにいるぞ！」

グレートはロープを見つけ、それにしがみついたが、まだ燃えるような霧で息が詰まっていた。

「引っ張れ！」ボーンは後ろに並んでいる男たちに叫んだ。全員が後ろに寄りかかり、

ロープとグレートは穴の壁を滑り上がった。安全な場所まで半分しか来なかったが、グレートの腕の皮膚が剥がれ落ち、濡れたティッシュのように穴の壁に張り付いた。握りしめた腕から肉が転がり落ちた。

彼は拳を握りしめ、ロープを滑り降りて霧の中へ転がり落ちた。ボーンはロープの端に輪がないのを見て、「もう一方のロープを持ってこい！」と叫んだ。

再び、グレートは顎だけが霧から突き出た状態で立ち上がった。しかし、腕の皮膚が消えたように、耳の肉もなくなっていた。完全に溶けてしまっていた。耳も聞こえず目も見えない彼は、ロープを探して穴の中を必死に走り回り、両腕で壁を掻き回した。彼は落ちた。そしてまた立ち上がった。ボーンはもう一方のロープを投げようとしたが、止まった。彼は司祭に呼びかけなかった。呼びかけることができなかったのだ。彼は動いている赤い球体が人間の頭だとさえ認識できなかった。しかし、グレートは恐怖に叫び声を上げた。その声のトーンは、刺激臭のある霧によって恐ろしく変わっていた。そして、もし熟練した兵士でさえもその記憶に焼き付くような叫び声が連続するとしたら

祭壇の係留場所にいた92人の兵士たちは、その位置からは穴の底で繰り広げられる恐ろしい出来事を目にすることができなかった。彼らにできるのは、生きたまま焼かれた男の悲痛な叫び声、絶望した司祭の痛ましい嘆願をただ聞いていることだけだった。兵士たちの目には涙が浮かび、心臓は激しく鼓動し、呼吸は速くなった。それでも彼らは動じることなく、下されるであろう命令を待ち続けた。

グレート最後の叫び声は、うめき声に近い音へと消え、やがて渦巻く霧が彼を飲み込んだ。ボーンは、今や横たわっているブラージの元へ素早く歩み寄った。

彼は横向きになり、苦痛に身をよじりながらページをめくり、詩の中に秩序を見出そうとしていた。ボーンは身をかがめて彼に向かって唸った。「男はまるでろうそくのように溶けていった。」

「何てこった、お前が呼び出したものは何だ！」ボーンはブラージに身を乗り出した。「あれはお前の祝福された幽霊軍団か、黒い霧か？よく聞け、枢機卿。私はお前のせいで部下を一人失った。もう一人失うわけにはいかない！ここから立ち上がって、お前がやったことを正せ。さもなければ、私の部下に穴の上に石板を被せるぞ。」彼は鎖から呼び出した6人の男の方を向き、元の位置に戻るよう命じた。

「そんなことは許されない！」ブラージは喘ぎながら抗議した。「石を閉じるには、正しい聖句を唱えなければならない。だが、精霊が現れてクレシーのイングランド軍に対して召喚するまでは、石を閉じることはできないのだ！」

「では今すぐやれ！詩を唱えろ！それを送れば、私が石板を被せてやる！」

「召喚できる精霊などいない。彼らに彼らにもっと時間を与えてあげて。霧は彼らではない！」

「どうしてそんな確信が持てるの？幽霊を見たことがあるの？」

「私は見ていない！しかし、私は多くの霧を見てきた！」

「もう十分見たし、十分聞いた！」とボーンは叫んだ。「詩があろうとなかろうと、私は石板を閉めるつもりだ！」

「聞け、ボーン」ブラージは苦痛にうめいた。「石板を穴の上に被せても、石は閉じない。石板で覆っても、その下は開いたままだ。適切な詩だけがそれを閉じることができるのだ！」

「お前が自分の詩を見つけ出すか、さもなければ私がその忌々しい石板を閉じる詩になってやる！」

「だめだ！石を急がせるな、俺を急がせるな！頼むから、船長、俺を見てくれ！痛みで息もできないんだ！」彼はページをめくり、震える指でページをめくりながら読み返した。「もう少しだけ、頼むよ」と彼はうめき、頬を伝う涙と、脚の焼けるような痛みで気が狂いそうだった。

「枢機卿、私には一刻の猶予もありません！あの霧は今まさに立ち昇っています！それが穴から溢れ出したら、私は石板を閉じる機会を失ってしまうでしょう。私の部下は配置につき、今は私の好機です。さあ、あなたは」

「ヒューッ！」ボーンは突然吹き付けた空気の塊の方を振り向いた。それは穴から吹き付けてきたものだった。

「持ち場を守れ！」と彼は部下たちに叫んだ。隊長は薄暗い穴を調べ、周囲の床置き燭台の炎はすべて消えていた。窪みからは冷たい風が吹き抜けていた。祭壇の覆いには、絶え間なく吹く風にタペストリーがひらひらと揺れていた。

「だめだ！捕まえろ！」ブラージは叫びながら、床に散らばった紙片を手探りで拾い集めた。しかし、紙片のいくつかは風にあおられて穴に落ちてしまった。彼は起き上がり、乱れた紙片の山を胸に押し当てた。「隊長、どうやって…この風…私にはどうすることもできない…」

ボーンは肩越しに言い返して遮った。「もし失敗したら、私はお前は逮捕される。そして私と共にパリに戻り、国王陛下に、教会が密かに隠してきたこの忌まわしい行為について報告するのだ。」

ブラージはうめき声を上げながらよろめき立ち上がった。彼は顔をしかめながら、風の吹き込む穴からページを運び出し、穴からよろめき去った。

ボーンは穴に近づきながら叫んだ。「扉の衛兵たちよ、お前たちは私の松明持ちだ！持ち場を離れ、中庭から補充兵を連れてこい。お前たちが今守っている扉の外側を警備するために、武装した男を7人ずつだ。教会に入ろうとする者は誰でも斬り殺すと伝える！さあ、行け！」衛兵たちはすぐに駆け出し、大聖堂の扉が3つ閉まった。ボーンは肩越しに振り返った。「アーモンド、動くもの全てに目を光らせていろ！」彼は振り返った。「縄の番の男たちよ、私の合図で一斉に引っ張る準備をしろ！」

そして、折れた短剣を抜きながら、ボーンは慎重に穴に近づいた。

大聖堂の向こう側で、グレヴィルは頬の涙を拭い、深呼吸をし、床から顔を上げ、クロディウスの方を向いて、怒りを込めて問いかけた。「グレイト修道士が死んだ今、教会の外を疾走する馬のせいで床がまだ揺れているとでも思っているのか？」

クロディウスはグレヴィルを睨みつけ、腕を組んで肩を柱に預けた。「口を慎め、グレヴィル。背後から撃たれる以外に、グレートを救う方法は何もなかった。なぜ何もなかったんだ？」クロディウスは震えながら言った。

彼は頭を下げて続けた。「それに、私たちは彼にあの穴に降りるように強要したことは一度もありません。」選択は彼一人によるもので、彼は枢機卿の機嫌を取ろうとただけでそうしたので。さあ、すすり泣きをやめて声を低くしろ。さもないと、我々二人とも撃たれてしまうぞ！」クロディウスは咳払いをして、穴の方に目を向けた。

二人の間にしばしの沈黙が流れた。

やがてグレヴィルは小声で言った。「穴の中で何かが起きた。燭台の炎がすべて消えた。そして、一定の風が吹いているのを感じる。」彼はクロディウスをじっと見つめた。「警備兵が扉にいないうちに、そして隊長が背を向けているうちに、教会からこっそり抜け出そう。」

「ほら、あそこだ」クロディウスはさりげなく大聖堂の向こう側を指さしながら、再び咳をした。「扉にすらたどり着けないだろう。」

グレヴィルはクロディウスの肩越しに振り返ると、アーモンドがじっとこちらを見つめているのに気づいた。グレヴィルはクロディウスに囁いた。「だが、彼はいつまでも私たちを見張っているわけではないだろう。もしかしたら、床に座り込めば、彼は目をそらすかもしれない。」

クロディウスはしつこい咳に倒れた。グレヴィルは視界の隅で、誰もいない教会の正面を観察した。目をぐるぐる回しながら、外壁をくまなく辿り、都合の良い脱出経路を探した。その向こうに、壁に石の十字架があり、そこに彫像が掛けられているのに気づいた。

十字架にかけられたイエスの像 吊るされた像は、ゆっくりと動く振り子のように揺れていた。

グレヴィルはそれをよく観察するために少し離れ、「動いているのが見えますか？」と叫んだ。

揺れる十字架を指さしながら、彼は顔の前で手を振って咳をしているクロディウスを見た。その時初めて、光の角度が変わってグレヴィルは柱の上端から舞い降りてきた薄い塵が、クロディウスの上に降り積もった。二人の神官はたちまち見上げ、塵の発生源を探した。

「モルタルが緩んでいるんだ」とクロディウスは言った。彼は柱から離れ、咳払いをして高い天井を見上げ、それからグレヴィルの方を振り返った。グレヴィルは恐怖におびえ、口に手を当て、目を大きく見開き、天井の壁画を見つめていた。

クロディウスは視線を追って天井の一番高いところを見ると、そこに描かれた三人の王が、まるで頭を下げて下を向き、二人のほうをじっと見つめているように見えた。

「そんなはずはない」クロディウスは額に手を当ててつぶやいた。「ただの壁画だ。照明のせいか、あるいは埃のせいか、動いているように見えるだけだ。」二人の司祭は柱の列を越え、教会の壁の方へ後ずさりした。グレヴィルは「神よ、私たちは一体何をしてしまったのですか？」とささやいた。

大聖堂の扉が3つ開き、そしてまた閉まった。ボーンは穴のそばにひざまずき、その暗い底を覗き込んでいた。すると、12本の松明を持った6人の兵士が彼を取り囲んだ。

揺らめく松明の炎の下で、彼らの髪と衣服は穏やかなそよ風になびいていた。穴が照らされると、ボーンは飛び上がった。「下がれ！」と叫び、部下たちに腕を振りながら数歩後退し、安全な距離まで立ち止まって、穴の空間を支配するようになったゲートストーンの驚くべき新しい姿を眺めた。

揺らめく松明の光と冷たい風の中、兵士たちの吐息で霧が立ち込めた。ボーンは渦巻く柱を調べた。それは小さな静止した竜巻のように見え、穴の底の中央にあるゲートストーンの代わりに立ち、わずかに高だけだった。

大聖堂の床面よりも高い位置にあった。黒く渦巻く柱の頂上は基部と同じ幅で、中心部は空洞のように見えたが、その空洞は暗すぎて内部は見えなかった。しかし、穴の明るい縁の近くで、ボーンは、かつて穴の縁から溢れそうだった墨のような霧が、渦に徐々に引き込まれるように、穴の壁に沿って深く沈み込み、後退し始めていることに気づいた。そして、霧が晴れていくと、穴の底が見え、横たわる司祭と兵士の生気のないシルエットが現れた。

松明を持った者たちを呼び集めた。強まる風の中、松明の炎から燃え盛る残り火が飛び散った。ボーンは短剣を抜き、いつでも使えるように構えながら、ゆっくりと穴に近づいていった。

彼らは薄暗い穴の縁の近くで立ち止まった。兵士の一人が懐中電灯を高く掲げ、指差した。下へ。「キャプテン、まだ生きてます！」ボーンは影のような人影が仰向けに転がるのを見ていた。二人の人影は交代で、旋風の根元に向かって転がり、近づくにつれて動きが速くなった。キャプテンはテザーを要請しようとしたが、彼らが自力で動いているのではないことに気づいた。死体は床を滑り、旋風に飲み込まれた。

たちまち、旋風の一定の唸りの中から鈍い音が響き渡った。まるで大きな泥の塊が何度もぶつかり合うような、鈍い音だった。ボーンは後ずさりした。渦の最も近い壁を見つめると、黒く不均一な形が現れ、その外縁を包み込み、回転する柱の中を互いに追いかけて合っているように見えた。黒い旋風の滑らかな縁は、暗く不規則な形のでこぼこした表面に変わった。すると、旋風に繋がったままの物体が一つ、振り子ののように揺れ出した。突き出た部分は、柱の横をぐるぐると回り、緩く、完全に伸びきっていた。その瞬間、渦巻く動きのぼやけた視界の中で、ボーンは飛んでいるものがぐったりと揺れる腕だと認識し、その時初めて、柱全体が固く締まったものに変わっていることに気づいた。

黒ずんだ、回転する人体の一部を集めたもの。

ボーンは短剣を落とし、床にガチャンと音を立てた。彼は明らかに敗北を認め、近くにいた兵士に無理やり満足そうな表情で話しかけた。「国王陛下は、平和な修道院で善良な修道士たちと過ごす滞在を楽しめるだろうと保証してくださった。食事もしっかり、修道院のワインも、もしかしたらイノシシ狩りや隊員のためのローストもあるかもしれない」ボーンは兵士のベストを掴み、目をギラギラさせながら、回転する柱を指差した。「一体、何だあれは？」ボーンは言葉を失った兵士を押し退け、立ち去り、髪をかき上げながら大聖堂の隅々まで見回し、慌ただしく円を描くように歩き回った。「もうたくさんだ！枢機卿？アーモンド、枢機卿はどこだ？」

教会の向こう側で、アーモンド軍曹は涙ぐんだ目を腕で拭いた。彼は低い声で、上から絶えず舞い降りてきて、自分と少数の弩兵たちを覆い尽くす細かい埃の層を呪った。「枢機卿は見えません、隊長」とアーモンドは呼びかけ、目を瞬かせながら、二丁の弩を部下たちの背中に置き直した。

ガシャン！大きな石が天井から落ちてきて、部隊のすぐ目の前の床に激突し、粉々に砕け散った。クロスボウ兵のうち2人が飛び上がった。アーモンドは飛び出し、「無理強いするな」と唸りながら、クロスボウを彼らの首の後ろに押し付けた。「持ち場につけ」男たちは膝をつき、

彼らは繋ぎ場にいる兵士たちに武器を向けた。アルモンドは後退し、両手の弓を彼らに向けたままだった。しかし、彼の視線は別の場所、大聖堂の向こう側にいる二人の修道士に向けられていた。別の司祭を見失って、隊長をさらに失望させてしまうことを恐れていたのだ。

クロディウスとグレヴィルは教会の扉の方をじっと見つめながら、落ち着かない様子で身をよじった。すると、二人はすぐに振り向くと、アルモンが弩兵の一人に指示を出しているのが見えた。ひざまずいていた兵士は、修道士たちに向かって武器を振り下ろした。

「奴は俺たちを撃つぞ！」グレヴィルはそう叫び、クロディウスのローブを強く掴んだ。クロディウスは彼を叱責した。「お前のせいで、そうするかもしれないぞ！彼はグレヴィルを突き飛ばした。「お前が自制できないなら、今やクロスボウは我々二人に向けられている。」彼は鼻を天井に向けて、明らかに軽蔑の表情を浮かべながら、鼻を高く上げた。グレヴィルは不満を漏らした。「ここは安全じゃない！アーチの石が崩れ落ちてくるぞ！」「イエスの母よ」クロディウスは突然そう呟き、天井を見つめた。「こんなことが現実であるはずがない。」

祭壇のはるか上空、二人の司祭以外には誰にも見えないところで、壁画に描かれた三人の王がまるで生きていたかのように動き出し、頭を振り回し、顔を極度の苦痛に歪ませた。しかし、動いていた彼らの姿は突然静止し、口を大きく開け、目を大きく見開いてクロディウスとグレヴィルを見下ろしていた。そしてその瞬間、凍りついた顔がパチパチと音を立てて燃え上がり、消えゆく煙と焦げた絵の具の破片が黒い雪のように床に舞い降りた。兵士たちはようやく顔を上げ、自分たちに降り積もった灰の出所を探した。

クロディウスは咳をして顔の前で手を振り、舞い上がる細かい塵の霧を払いのけようとした。それから、冷水の中で過熱した岩が砕けるような鋭い破裂音の原因を探し、彼の傍らにそびえ立つ巨大な柱の表面全体に放射状に広がる亀裂を発見した。彼は柱から離れ、遠くからそれを調べた。湾曲した表面の周りを螺旋状に舞い落ちる塵のシャワーを観察した。突然、亀裂が広がり、大きな石の塊が柱から剥がれ落ち、一斉に床に落ちて耳をつんざくような音を立て、大聖堂にいる全員の注意を瞬時に引きつけた。柱の破片が剥がれ落ちるにつれ、塵と落下する瓦礫の中から、クロディウスは柱の崩壊がランダムではないことに気づいた。より深い部分の露出した部分が、

巨大な石彫りの脚の側面には、途切れることのない石が滑らかな表面として現れた。

岩が降り注ぐ中、僧侶は、落ちてくる岩の破片の下から巨大な像が徐々に姿を現すのを目にした。その巨大な像は、鎧を身にまとった巨人が、長剣を握りしめている。もう一方の手は、大聖堂の屋根を支える石の塊の下に押し付けられていた。薄い鎧板を何枚も重ねたスカートをまとった巨人は、古代ローマの戦士を思わせるスパルタ式の戦闘服をまとい立っていた。

湾曲した板状の装甲が下肢と上腕を覆い、兜は四方八方丸みを帯びており、頭飾りの最上部は上に向かって鈍い先端へと収束していた。広い唇の間にはギザギザの歯が並び、鋭い先端が突き出ており、額の中央には単眼の大きな目が一つだけあった。

グレヴィルは柱の列を駆け抜け、大聖堂の外壁に身を縮めて立ち尽くした。そびえ立つキュクロプスの像から視線を外し、視界の隅で捉えた奇妙な動きに目を向けた。

壁際に、彼のすぐ横、真上に、石でできたイエスの像が彫られた十字架が掛けられていた。それは動いていた。グレヴィルはイエスのような像を見つめた。その胸は、まるで呼吸に苦しんでいるかのように、激しく上下していた。修道士はうめき声をあげ、壁にもたれかかった。圧倒された彼は体を丸めてうずくまり、まるで恐ろしい夢から目覚め、自分の寮の静かな部屋に突然いることに気付くようにと泣きながら祈った。クロディウスは新しいキュクロプスの像を指さしながらボーンに叫んだ。「見てください、隊長！神にかけて、あなたは気が狂ったのですか？あなたの兵士たちはこれに抵抗できません！今すぐここを離れなければなりません！」

しかし、ボーンはクロディウスに背を向けていた。隊長は、ロープを放して隊列から外れてしまった祭壇の係留係の兵士に命令を叫んだ。「持ち場を離れるな！今すぐ係留係に戻れ！」しかし、兵士は逃げ出し、大聖堂の扉に向かって駆け出した。隊長は素早く振り向き、「アーモンド！」と叫んだ。

突然、クロスボウが発射され、矢が飛び交い、男は背中に何本もの矢が突き刺さったまま床に倒れ込んだ。彼はもがき苦しみ、窒息し、息絶えた。その時になって初めて、ボーンはクロディウスに指を突きつけながら言った。「黙れ、神父よ。黙れ！」

ボーンは振り返り、風になびく髪をかき上げ、耳の後ろに留めた。彼は松明を持った者たちの方へ歩み寄り、「私と一緒に穴に近づけ！炎を風から守れ！集まって松明を灯し続けろ！一つの炎が次の炎を灯すのだ！」と叫んだ。彼は穴の縁に近づいた。傾いた松明の炎の微かな光の中で、穴の壁に亀裂が生じ、空洞の最上部の縁を越えて上へと伸びているのが見えた。それでも、亀裂はゲートストーンから放射状に広がり、大聖堂の高い床を通り抜け、彼のブーツの下にまで達していた。ボーンは後ずさりした。

穴の中で、回転する漏斗がうめき声をあげ、速度を増すにつれてその音は大きくなっていった。そのうめき声の中には、無数の叫び声が次第に高まり、まるで計り知れない苦しみの巨大な集まり、千もの苦悩する魂の咆哮する合唱団のようだった。

ボーンは「枢機卿はどこだ？」と叫んだ。しかし、彼の目は目の前に広がる黒く回転する圧縮された身体の塊に釘付けになっていた。そして彼は命令した。松明を持った兵士たちが騒音に負けないように叫びながら、彼は兵士たちを穴から押し退けた。「倒れろ！」

下がれ！ お前たち3人を除いて全員、ライトを当てろ。お前たち2人、この教会にもっと松明が必要だ！ 用意しろ！ そしてお前、縄のそばにつけ！」彼はアーモンドに叫んだ。「準備しろ！」それから彼は部下たちの後ろに回りながら全員に怒鳴った。「私の合図で、石板を閉じるぞ！ 以前と同じように均等に並べ！ 歩調も同じにしろ。そして、もしお前たちのうち一人でも私に逆らうようなことがあれば」しかし、隊長は口を閉じ、ゆっくりと穴の方を向き、渦巻く暗い肉の柱の中心からゆっくりと立ち上がる滑らかな深紅の姿をじっと見つめた。

~*~

大聖堂の向こう側で、クロディウスはグレヴィルを見捨てて教会の扉に向かって逃げたが、その時、クロスボウの矢が岩壁に命中した。火花が飛び散り、クロディウスの顔を見て、彼は急に後退し、逃げることを考え直すことにした。彼はまだ床にうずくまっているグレヴィルのところへ退却した。遠くから、クロスボウ兵が弾を装填し直し、再びグレヴィルに照準を合わせているのが見えた。クロディウスはグレヴィルの方へゆっくりと近づきながら、頭を下に向け、瞬きもしない石の目で司祭をじっと見つめている巨大なキュクロプスの像に警戒の目を向けた。

クロディウスはグレヴィルの肩を軽く叩いて慰めた。「気をしっかり持て。お前を脱出させるには、お前が強くならなければならない。」

グレヴィルは起き上がり、目を拭った。「ああ、ここから出よう。そう、そうだ、ここを出よう。」グレヴィルのうつろな目は、教会のどこかで何かを探しているようだったが、見つけれずにいた。しかし、彼の目はすべてを一度に発見しているようだったが、それは全く異なる光の中でだった。彼はつぶやいた。

「疲れた。朝の夕べの祈りの前に、寮に戻って休まなくてはならない。」

「確かに。」クロディウスはグレヴィルのばかげた提案に同意した。彼らの悲惨な状況についての新たな考えで修道士をさらに怖がらせないようにするための。「そうすべきだ。」

そろそろ出発の時間です。朝の夕べが始まる前に、安らぎと休息を見つけられるでしょう。

グレヴィルはクロディウスを見上げたが、視線はクロディウスの肩越しに遠くの天井へと移った。彼の虚ろな視線は、広大なフレスコ画に描かれた渦巻くイメージに釘付けになっていた。翼を持つ悪魔が天使を殺戮する光景。青い炎の輪を突き抜ける空飛ぶ悪魔たちが、剣を高く掲げ、顔のない三人の王の首を刎ねる光景。呆然としたグレヴィルは、天井に映し出される恐ろしい出来事をまるで受け入れるかのように、弱々しく微笑んで頷いた。

クロディウスはグレヴィルを平手打ちした。「私を見ろ！今すぐ出発だ！好機が訪れたら、大聖堂の扉へ急げ。速度を落としたり、立ち止まったりするな！

ドア以外何も見ないで。私はすぐ後ろにいるから。私を捕まえられるかな？

「ああ、確かに転んだようだが、まだ起き上がれる。さあ、出発しようか？」グレヴィルはそう言って、クロディウスに手を差し伸べて立ち上がらせようとした。背後から大きな物音がして、二人は一斉に振り返ると、大きな石の十字架が壁から落ちていた。その残骸は床一面に散乱し、まるで粉々に砕け散った石の山のようなだった。

破片。しかし、散らばった破片の中で、認識できる部分は一つもなかった。かつてイエスの彫像だったもので、壊れた破片はすべて、かつて彫刻された石の十字架だったものだけに属していた。二人は手を握り合い、クロディウスはグレヴィルを立ち上がらせようとしたが、その時

「シューッ！」クロディウスの背後から、怒った猫のような鋭い唾を吐く音がした。クロディウスが振り向いたのと同時にグレヴィルも後ろに飛び退き、二人の修道士は床に倒れた。二人は座ったまま固まり、目を見開いて呆然としていた。彼らのローブは大聖堂の風になびいていた。彼らは、どんな聖職者でも言葉にできないほど忌まわしいものと考えたであろうものの顔をじっと見つめていた。彼らの前に立っていたのは、かつて彫刻された十字架に取り付けられていた石像だった。今は切り離され、おそらく小型犬ほどの高さで立っていた。その胴体はジャッカルに似ていた。しかし、針のような歯を除けば、頭部は変わらず、棘の冠をかぶった以前の彫刻されたイエスの姿と一致していた。また、離れて直立し、遮るものがない前足とは異なり、その像の後ろ足は床に後ろ向きに倒れており、どちらも釘で打ち付けられ、かつての石の十字架の大きな残骸に繋がれているように見えた。グロテスクな像は、後ろにねじれた後肢とまだ繋がっている岩の塊を引きずりながら、彼らに向かって這い寄ってきた。クロディウスとグレヴィルは、迫りくる石像から慌てて逃げ出した。

「うおおおお！」そびえ立つキュクロプスの轟く声が大聖堂の内部に響き渡り、一瞬にしてあらゆる音をかき消した。クロディウスは巨人が片方の大きな目で自分を見つめていることに気づいた。像は天井から手を離し、もう一方の手で巨大な剣を振り上げ、柱の角張った台座の上から降り始めた。その時、二人の司祭は飛び上がり、壁に向かって駆け寄った。石の巨人はサンダルを履いた足を教会の床に叩きつけ、かかとの下から敷石に亀裂が広がった。屋根の石と埃が動く像に降り注いだ。突然、支えのない大聖堂の屋根の部分が崩れ落ち、轟音とともに、巨大な瓦礫の柱が巨人の上に落ちた。

突然の衝撃でキュクロプス像は粉々に砕け散り、砂利と石の雪崩となって床に崩れ落ちた。巨大な塵の塊が床を覆い、風に巻き上げられ、隅々まで舞い散り、教会の視界を完全に遮った。床の上では、石のジャッカル像が壊れた十字架の破片を引きずりながら走り回っていた。それは大聖堂の中心に向かって突進し、半ば閉じられた穴に飛び込んだ。まるで膿んだ疫病のように、地獄は聖なる像を容赦なく食い尽くし、大聖堂を飲み込んだ。そして、謎めいた瞬間は、ますます悪化していく悪夢へと転落していった。

「引っ張れ！」ボーン大尉が叫んだ。兵士たちが引っ張り、ロープが伸びるにつれ、祭壇の石板は割れた床に擦れながらさらに前に滑り出した。唸るような風と舞い上がる砂塵の中、男たちはほとんど耳も目も聞こえない状態だった。ゆっくりと迫ってくる石板の下に穴の3分の1が覆われ、床のますます広がる亀裂からはシューという音が響いていた。

凍てつく霧を噴き出しながら。男は悲鳴とも言えないような声で叫んだ。ボーンはすぐに隊列の中に空席があることに気づき、床には霧と氷の結晶の柱を噴き出す大きな亀裂があった。彼は隊列を駆け抜けた。

そして、敷石に広がる亀裂を飛び越えた。しかし、間に合わなかった。地獄の底まで続くかのような深い裂け目に、自分の兵士を見つけることさえできなかった。彼は、今や炎のない松明を両手に持っている残りの兵士たちに叫んだ。「すぐに隊列の後ろに回り込め！我々の誰かが倒れたら、すぐにその位置を取れ！」彼は遠くの壁の方を向いた。「アーモンド、指揮を執る準備をしろ！」兵士たちが松明を落とし、穴から逃げ出すと、ボーンは床の裂け目にまたがった。彼は倒れた兵士の代わりに、自分の体をロープに繋ぎ、ロープに繋がれた兵士全員に警告した。「我々は一心同体で引っ張り、一心同体で死ぬのだ！」

「持ち上げろ！」ボーンが叫んだ。青ざめた拳がロープを握りしめる。震える男たちがシューシューと音を立て、うめき声をあげた。再び、祭壇が少しずつ前に進んだ。渦巻く柱から氷の雹が降り注ぎ、兵士たち一人ひとりに降り注いだ。男たちは濡れて埃まみれで、顔をしかめる者もいた。凍てつくような髭の下には、激しい戦闘の最中にしか見られないような、恐怖と絶望の表情が浮かんでいた。

「うわっ！」かつて大聖堂全体を覆っていた塵の霧が急速に晴れていく中、隊長は、喉から次々と光り輝く幻影を放出し続ける、きらめく修道士の残骸をじっと見つめていた。幻影は次々と死体の口から飛び出し、前のものよりも速く飛び去っていく。死体の喉は激しく羽ばたき、げっぷを繰り返すうちに縦に裂けてしまった。突然、修道士の頭と首全体が肩とびったりと一体化し、あらゆる方向に、まるで急速に熟した肉質の花のように裂けた。残った首のない胴体からは、輝く精霊の柱が噴出し、叫び声を上げ、脈動しながら上へと伸びていった。大聖堂の高い所は、光り輝く半透明の姿で埋め尽くされた。至る所で、幻影が天井、壁、床から消えたり現れたりした。大聖堂全体が不自然な光を放っていた。

祭壇の石板は、巨大な石が邪魔なグレイト修道士の死体の上を転がるたびに短い間隔で滑り、重い石が持ち上げられるたびに、皮を剥がされた胴体が曲がった。さらに後方に押し戻された死体は、その途方もない重みで背骨を折ってしまった。死体はひっくり返り、急激に横に折れ曲がった。このおぞましく不自然な角度で、もがき苦しむ頭部の残骸は引きちぎられ、轟音を立てる黒い柱の下に飲み込まれていった。突然、喉の精霊の流出は止まったが、その広がった首の穴はうなり声が、祭壇の石板が突き刺さるたびに響いた。しかし、ねじれた残骸は、やがて滑り落ちる石の下に消えていった。永遠に続くかと思われたが、耳をつんざくような轟音は次第に静まり、風は穏やかになり、塵は落ち着き、そして響き渡る鈍い音が大聖堂の床を揺らした。

ボーンと部下たちは、ついに穴を覆い終えた。低い轟音が床から響き渡り、祭壇の頂石の下で、黒焦げになった人体の断片が渦巻いていることを物語っていた。

ブライジ枢機卿はゲートストーンを開くことに成功し、精霊の大群を解き放つことができたものの、クレシーでイングランド軍に送り込むための残りの呪文を唱える機会を得ることはできなかった。そのため、目的もなくさまよう幽霊の群れは、誰の指示も命令もなく、ただ天井を旋回するだけだった。

選別。

「くそっ、枢機卿め！」ボーンの声がまだ残る暗闇に響き渡ったが、その響きはすぐに重なり合うこだまの中に消えていった。

～*～

教会の外、修道院の敷地の向こう側で、オディーノは常緑の低木の間から覗き込んだ。4人の兵士がイワンのぐったりとした遺体をカタコンベの正面入口から運び出すのを見て、オディーノは吐き気を催し、膝が震えそうになった。兵士たちは遺体を浴場まで運び、外壁のそばに置いた。オディーノは涙をこらえ、ラザロのことを考えていた。中庭に集まっている兵士たちをじっと見つめた。彼らの注意は完全に教会に向けられていた。兵士たちは空を指差し、大聖堂の屋根から現れた光り輝く幻影を指さした。黄色く光る姿は、高く段々になった石造りのグロテスク像の間を互いを追いかけながら、教会の尖塔の周りを旋回していた。まるで鳩が巣を作る場所を巡って争うように、それらは群れをなしていた。

地下墓地でラザルスを見つけられなかったボーンの兵士たちは地上に戻り、中庭に出たが、大聖堂の上層部を光り輝く精霊たちが飛び回っているのを発見した。目の前で繰り広げられる超現実的な光景に魅了された衛兵たちは、仲間たちと集まり、オディーノが隠れていた茂みの列に背を向けた。修道士は好機と捉えた。

オディーノは茂みから飛び出し、カタコンベの建物の脇の入り口から滑り込んだ。彼は長い廊下を駆け下り、角を曲がって耳を

鉄の留め金で固定された、地下墓地の入り口にある木製の扉。それから彼はそっと扉を開けると、中からは誰も守られていなかった。まだ誰にも気づかれていない彼は、薄暗い階段をゆっくりと下り、廊下を駆け抜け、あちこちと向きを変えながら、地中深くへと降りていき、井戸の穴以外にはどこにも繋がっていない、途切れることのない通路を進んでいった。

井戸の穴に着くと、オディーノは暗い空洞に松明を差し込み、「ラザロ？」と囁いた。しかし、部屋は空っぽで、床の広い溝を通して流れる地下の泉のゴボゴボという音だけが聞こえた。オディーノは足を踏み入れた。

中に入って、彼は部屋の奥までよろよろと移動し、そこでたくさんの壁沿いに並べられた木製の水桶。彼は溝に近づき、水桶を岩の床に軽く叩いた。「ラザロ？どこにいるんだ？オディーノ修道士だ。」それから彼は松明を溝の向こうにかざし、水面下を探索した。

オディーノはバケツを床に叩きつけた。バケツは粉々に砕け散り、オディーノは「ラザロ、出てこい！」と叫んだ。すると、地下水路の水面が破裂し、ずぶ濡れのラザロが現れた。彼は床下の小さな洞窟何世紀にもわたる浸食によってできた空気の詰まった空間に身を隠していたのだ。幸いなことに、その存在を知っていたのはたった5人だけだった。ラザロ、オディーノ、ラザロが信頼を寄せていたミゲルとタテウスという名の二人の奇形の従者、そして今や床下の洞窟のそばに横たわっている銀髪のたくましい修道士だ。浴場は、永遠に静まり返った。

「父は？」
「ああ。イワンは亡くなった、ラザロ。だが、彼はいつも君と共にいるだろう。ここに」オディーノはラザロの胸を軽く叩きながら答えた。彼はごくりと唾を飲み込んだ。「さあ、よく聞け、坊や。時間がない。急いで出発しなければならない！」彼はバケツの残骸を脇に放り投げ、ラザロの差し出した手を握り、水の中から彼を引き上げた。ラザロはロープベルトから滴るマスクを絞り出そうとしたが、オディーノがそれを取り上げて川に投げ捨てた。「そんな必要はない。君の世界は変わったんだ」ラザルスは、急流がマスクを押し流していくのを見ていた。そして顔を覆うフードは、壁の摩耗した穴から滑り落ち、地底の暗い水の中に永遠に消え去った。

彼らは井戸の穴から逃げ出し、曲がりくねったトンネルを駆け上がった。彼らの前には、大柄な修道士が燃え盛る松明を暗闇の中に突き出し、彼らの後ろでは、ラザロの滴るロープから滴る水がトンネルの奥へと流れ込むにつれて、煙の筋が彫り込まれた天井に長く残っていた。さらに修道士の肩の向こうでは、少年たちの大きく見開かれた瞳に映る反射が、揺らめく松明の炎の光の中で、一對の輝く黄色の円盤のように見えたかもしれない。ラザロは歩調を速め、濡れたロープがパチパチと音を立ててオディーノのそばに倒れ込んだ。彼はオディーノに尋ねた。「なぜ門石は叫ぶのですか、修道士？」

オディーノは突然立ち止まり、息を整えるために壁にもたれかかった後、懐中電灯を青い瞳に向けました。「叫ぶ？ どうやって叫ぶんだ？」
「聞こえる。心の中で。その音が。今もなお、あちらから聞こえてくる。」ラザロトンネルの岩壁の最も高い部分を指差した。
オディーノはラザロの主張を吟味し、少年が大聖堂の方向、それもまさにその中心部を指差していることに気づいた。修道士は彼を叱責した。「もう二度とそんな悪口は聞きたくないぞ、坊主！今は黙っている、聞かれたら大変だぞ！」二人は再びトンネルを駆け上がった。

彼らは迷路のような地下墓地の通路を急いで進んだ。やがてオディーノは少年たちの部屋に飛び込み、かすれた声で「その濡れたローブを脱げ！」と叫んだ。彼は入り口の脇に倒れ込んだ。「着替えはあるのか？」

「それらはベッドの下にあります。」

「じゃあ、続けてください。あそこではかがめられないんです！別のフードはありますか？」

「あなたが私から奪ったものだけです、修道士様。」

「構わない。急いで服を脱いで着替えろ。」オディーノは部屋の外を覗き込んだ。そしてメイン通路を進んだが、何も見えず、ただ暗闇が広がっているだけだった。ラザルスが身を隠した今、誰もカタコンベの松明を灯し直そうとしなかったからだ。それでもオディーノは見張りを続け、かすかな物音に耳を澄ませ、遠くから探るような松明の光が漏れるのを待っていた。

オディーノが振り返ると、ラザロがベッドのそばにひざまずき、服でいっぱいの中箱の上で静かに泣いていた。

「どうしたんだ、坊主？」オディーノは低い声で言った。

ラザロは箱の縁に手を置いた。「フードが1つある。新品だ。それに2つある。」

さらに「一つはミゲル宛て、もう一つはタテウス宛てだ。」

「さっさとやれ、ラザルス！今はそんな時じゃない！」オディーノは松明を持って駆け出し、ローブとマスクを箱から取り出し、ベッドの上に置いた。

ラザロは顔を拭き、飛び上がって立ち上がり、素早く服を脱いだ。オディーノはトーチを渡した。

少年はベッドの上で、空いている方の手で服を分けながら、ぐるぐる歩き回った。

胸を押さえ、裸で震えていた。ラザロの痩せた体は、お腹にへそが全くないことを除けば、ほぼ同年代の普通の少年と何ら変わりなかった。しかし、ラザロと他の従者の少年たちの最大の違いは、修道院の住人たち 従者、修道士、そして修道院長までも が想像していたような猫背ではなかった。見た目には、彼の背骨は健康な少年と同じように完璧にまっすぐだった。最も顕著な違いは、

ラザロは、肉と骨でできた、折り畳まれた膜状の翼を一对の備えていた。

ラザロは翼を広げ、素早く水を振り払った。彼は翼を背中に折りたたんで丸め、前腕に服をかけ、眉間にしわを寄せ、水滴がしわくちやになった額を伝って滴り落ちるオディーノを探しに振り返った。

「お許しください、修道士様」とラザロはうつむきながら言った。

オディーノはラザロのベッドの方を指さして言った。「ベッドカバーを使って体を拭きなさい。」

ラザロがそうすると、オディーノは腕を差し出した。「さあ、服を着なさい。」

少年が服を着ていると、オディーノはベッドの上にかけてられたもう一組の服を見せた。ローブ、腰布、フード、そして足用のミトンが二組。「夜は冷たいから、この二着を重ね着しなさい。さっさと済ませなさい！」

オディーノはラザルスの肩を軽く叩き、急いで戸口に戻り、ラザルスが忙しくしている間、見張りに立った。「よく聞け、ラザルス。我々はカタコンベを出るつもりだ。だが、修道院の敷地内には多くの兵士がおり、彼らはあらゆる手段を尽くして我々を阻止しようとするだろう。」

「我々の脱出だ。闇に紛れてはいるが、姿も声も聞こえてはならない。風のように移動しなければならない。」オディーノは咳をこらえ、ラザルスの方を見た。「私を捕まえてくれるのか、坊や？」

「はい、修道士様。しかし 明日までカタコンベに身を隠せるかもしれません」とラザロは震える声で提案した。修道士は少年がマスクを頭にかぶる直前、彼の顔には深刻な不安が浮かんでいた。

オディーノは、ラザルスが修道院の写字室の書物から得た知識を除けば、地下墓地の外の世界についてほとんど何も知らないことを明らかに悟った。ラザルスはフードの紐を締め直し、「兵士たちはここで私たちを見つけれないかもしれない。ベニオントンネルの中に空洞の壁があることを知っているんだ」と付け加えた。

オディーノは部屋を横切って少年の肩をつかみ、揺さぶった。「だめだ！自分で責任を取らなければならない！カタコンベはもう存在しない。松明に火をつけたり消したりする必要も、ワイン造りも、壁や床の掃除ももうない。この瞬間から、従うべき命令は、すべてお前自身から発せられる。そして、お前はその命令によって生きるか死ぬかを決めるのだ！間違えるな、ラザロ！

「私はまだ修道士にはならない」

「例外はないぞ、ラザロ。お前の命がかかっているんだ！」ラザロは肩と頭を垂れ、黙って立ち尽くした。

オディーノは彼を解放し、ため息をついた。「今度は何だ？」

「恐れています、修道士様。」

オディーノは彼の前にひざまずいた。「そうすべきだ！」司祭は天井を指さした。「あそこにいる男たちは、お前を捕まえたなら殺すだろう。恐怖こそがお前を生かしておく条件だ。恐怖は良いものだ。」彼は松明を振った。「恐怖はお前の友だちだ。決して試したり裏切ったりしてはならない。」オディーノはベッドから2つ目の仮面を引き出した。「さあ、1つ目の仮面の上に別のフードをかぶせ、2つの仮面の上に3つ目の足用ミトンをすぐにかぶせろ！」オディーノは急に立ち上がり、戸口に戻った。

オディーノがラザロに説教する中、ラザロは慌てて服を着た。「お前はもう少年ではない。男なのだ。そうだろう？」

「ああ、修道士よ」とラザロはぶつぶつ言いながら、最初のマスクの上に二つ目のマスクをしっかりと被せ、もう一組の足用ミトンを手を取った。

「では、私の名前を思い出してください。私の名前は何でしたっけ？」

「あなたの名前はデロン・オディーノ修道士ですね、修道士。」

「違う！よく聞け ラザロという名の少年はもういない。彼は大人になったのだ。話し方も振る舞い方も、まるで父親のようだ。」オディーノが開いた手で壁の石を叩くと、ラザロはびくっと身を震わせ、仮面の暗い目穴を素早く僧侶に向けた。

「お前は今やイワンだ！イワンなのだ。さあ、もう一度答えてみる。今度はイワンらしく答えてみる。私の名前は何だ？」

「オディーノだ」とラザルスは答えたが、彼の視線はまだ足の手袋に向けられていた。

「よくやった」とオディーノは軽く微笑んで答えた。「今夜、君は自分の誇りとなるだろう。」

父よ。あなたは父から、あなた自身の内なる力を呼び起こすでしょう。父はあなたの人生の終わりまで、精神的にあなたを導いてくれるでしょう。そして、父は永遠にあなたと共にいるでしょう。」オディーノは自分の胸を軽く叩いた。「ここだ。あなたの心の中に。」オディーノはローブの下に隠された小さな物を感じながら下を見た。「ああ、そうだ。何かあった時のために、父はこれをあなたに持たせるようにと強く言っていた。そう、ここだ。」空いている方の手で、司祭は革紐のネックレスを引き出した。

首から下げていたネックレスには、細いストラップからぶら下がった小さな木製の十字架が付いており、ラザロはそれがイワンの祈りの十字架だとすぐに気づいた。オディーノは少年のところへ歩み寄り、ネックレスを頭にかけて、十字架をローブの下に隠した。「さあ、これで君はイワンだ。イワンは決して泣かないだろう？」

ラザラスはオディーノを見上げ、一對の松明の光の中で青い目が輝いていた。彼のマスクに開いた穴。

「いや、フリア いや、オディーノ」とラザロは答えた。「私は服を着ている。」

「では、出発しよう。」オディーノは彼の肩を軽く叩いた。「そして、何があろうとも、この修道院から一刻も早く逃げ出し、二度と近づかないようにすることだけは忘れるな。もし兵士に捕まったら、決して振り返ったり、ひるんだりしてはいけない。私一人なら殺されないだろうが、もしお前が捕まったら、二人とも殺されるだろう。お前はあなたの正体ゆえに、そして私はお前の逃亡を手助けした罪で。」オディーノは目を細めた。「私の命はお前の手に委ねられている。私を失望させるな、ラザラス。」

ラザロはローブの下に隠していた小さな物をこすり、肩を後ろに引いた。

「私はしない オディーノ。」

オディーノは燃えている松明をベッドの上に投げつけると、炎は瞬く間に掛け布団を包み込んだ。煙は岩の天井にたなびき、廊下へと流れ出した。

ラザラスはナラムシンの手紙と、そこに書かれた何ページにも及ぶ記号を思い出した。彼は飛び出してマットレスの藁の中に手を伸ばしたが、書類は見つからなかった。オディーノが彼を引き離した。「一体何をしているんだ？」

「中に羊皮紙の巻物があったんだ！」ラザロは燃えているベッドを指さしながら叫んだ。

「もうなくなりました。」

「放っておけ。」オディーノはラザラスの顔を炎からそらし、まっすぐ彼の目を見つめた。「必要なものは全て揃っている。さあ、よく聞け。もし見つかったら、井戸の穴に戻って、下の洞窟に身を隠すんだ。」

床は以前と同じだ。暗闇と煙が君を覆うだろう、そうだろう？

「そうしよう」とラザロは答えた。

僧侶はうなずき、額から浮かぶ新たな汗を拭いた。「では、行くぞ 風のように」と彼は囁いた。

オディーノは戸口付近で耳を澄ませ、それからラザラスを急いで薄暗い廊下へと案内した。彼らの後ろでは、燃え盛る炎の光が薄れ、通路の目立つ特徴が暗い影に覆われていった。オディーノは、ワインセラーへの深夜の巡礼の際によくそうするように、黒いトンネルを自力で進んだ。彼は指先を壁に滑らせ、自分がどこを歩いているのか正確にわかるような目印を探した。ラザラスは、彼が廊下の中央を進むにつれて、すぐ後ろを歩いた。

通路を進み、素早く着実な足取りで何にも触れなかった。暗闇の中では、少年の堂々とした歩き方は、まるで父親の歩き方と瓜二つだった。大股で踵を地面に打ちつけるような大股歩きは、足元の地面を揺るがすかのようにだった。僧侶と従者は一緒に角を曲がり、廊下の突き当たりにある遠くの光に向かって急いで進んだ。

やがてトンネルは高い囲いに開け、広い階段が上へと続き、石造りの踊り場へと繋がっていた。踊り場の上には、鉄の留め金で固定された無防備な木製の扉があり、修道院の地下墓地の入り口を示していた。地下墓地の階段のふもと近くでは、揺らめく松明が最後の炎を必死に保とうとしていた。そこから、赤く燃える燃えさしが床に落ちて消えた。オディーノは階段をよろよろと上り、階段の半分ほどを登ったところで、ラザルスがもう自分の後ろをついていないことに気づいた。彼は立ち止まって振り返ると、少年が弱まりゆく松明の光の下に立って、じっとこちらを見つめているのを見つけた。

床を見つめていた。司祭はため息をつき、足を引きずりながら階段を下りた。その時になって初めて、司祭は少年の気を散らす原因に気づいた。ラザロは床を見つめ、ほんの数分前までイワンの血管を流れていた血痕をじっと見つめていた。

「今はだめだ！」オディーノは彼の腕をつかみ、二人は一緒に階段を駆け上がった。僧侶はカタコンベの扉を少し開けて耳を澄ませたが、聞こえてくるのは静寂だけだった。彼は扉を勢いよく開けた。

ドアをくぐり、廊下へと突進した。しかし、角を曲がる前に、彼は肩越しに振り返ると、少年がドアの敷居に微動だにせず立っているのが見えた。まるでラザルスが、自分が深い淵の縁に立って、その淵を見下ろしているかのようだった。オディーノは数歩後ずさり、ラザルスを自分の方へ手招きした。「今だ！」

ラザルスは深呼吸をしてから戸口を突き進んだ。彼はオディーノに身を委ね、両手で僧侶のローブの壁を強く握りしめた。

「よくやった。さあ、すぐそばにいろ。」オディーノは彼を引き離した。ラザルスは何も言わなかったが、オディーノは彼の息遣いの速さを聞き、普段は表情を隠している仮面の下に、恐怖に目を見開いた表情を思い浮かべた。突然、隣の部屋から廊下でドアがバタンと閉まり、近づいてくる兵士たちの声がだんだん大きくなった。

「頑張れ、ラザロ！」オディーノはそう叫びながら、重い荷物を引きずって廊下を進んだ。「急げ」と肩越しに少年に囁き、ラザロをすぐ後ろに従えて、二人は騒音から逃げるように走り出した。

二人は建物の脇扉から飛び出し、修道院の壁沿いに並ぶ背の高い常緑低木の列の陰に身を隠した。そして、冷たい空気と夜明けの月の微かな光が、荒い息遣いに濃い霧をかける中、じっと動かずにそこに留まった。大聖堂の方角からは、兵士たちの言い争う声と、時折聞こえる号令の叫び声が聞こえた。夜の空気は様々な音で満たされていた。馬のいななき、ブーツの足音、扉の閉まる音、金属のぶつかり合う音。中庭は、活気に満ちた軍隊の喧騒で満ち溢れていた。オディーノ

オディーノはラザロのローブを引っ張り、ついてくるように合図した。二人は生け垣の後ろの狭い空間を横歩きで進み、背中を壁に押し付けながら進んだ。静かに修道院の南門へと向かうと、兵士たちの話し声が一步ごとに大きくなっていった。オディーノは人差し指を唇に当て、ラザロに黙っているように合図した。

修道士は茂みを注意深くかき分け、中庭の敷地内に立っている4人の兵士を確認した。彼らは開いていて無防備な修道院の門からかなり離れた場所において、修道士に背を向け、遠くの大聖堂の屋根を見上げていた。その屋根の上には、光り輝く幻影の雲が群がっていた。修道士は再びラザロを引っ張り、生垣の端をかき分けて、堂々と空き地へと足を踏み入れた。兵士たちがそこに留まると、オディーノは茂みの後ろからラザロを引っ張り出し、勢いよく門をくぐらせたので、少年はよろめいて転びそうになった。それでも、2人は無事に闇の中へと滑り込み、幸運なことに、まさにその悪が

ラザロは兵士たちに見つかって殺されることを恐れて身を隠した。なぜなら、彼の正体は今や兵士たちの注意をそらし、逃走を可能にするための道具として利用されたからである。

夜明けの月明かりの下を影のように移動する二人は、丘の斜面を駆け下り、岩と十字架が並ぶ短い乾いた草地、つまり修道院の墓地へと向かった。二人は塚を飛び越え、墓石の間を縫うように進み、墓地の奥へとたどり着いた。オディーノは頭ほどの高さの岩陰に身を隠し、巡回中の兵士の目からラザルスをそっと連れ去った。

そして彼らはそこで人目を避けて身を隠した。オディーノは岩にもたれかかり、息を切らしていた。ラザルスは彼のそばに立ち、あたり一面をざっと見渡した。草むら、墓石、遠くの丘、昇りゆく赤い月、そして無数の星が輝く広大な空。「気に入らないな」と彼は呟いた。「世界は広すぎる」。

オディーノは息を呑み、ため息をついた。「そして、夜が明ける前に、それはさらに大きくなるだろう。」

ラザロはくると振り返り、「今以上に？」と尋ねた。僧侶は肩を落とし、うめき声をあげた。「こんなことは絶対にうまくいかない。食料を取りに行かなければならない。」彼は少年を見て言った。「門番が気を取られている限り、寮と修道院への安全な出入りができる、警備されていない道を知っている。」

「私たちは脱出した！安全だ！」

「いや、ラザロ。最寄りの村までは徒歩で丸一日以上かかるし、日差しをしのげるような避難所まではまだ半晩かかる。それに、着ている服以外に、これから数日間の食料は何もないんだ。」

「道中で食料が手に入るかもしれない」とラザルスは提案した。

「世界がそんなに親切だったらいいのに。残念ながら、我々が進まなければならない荒涼とした道には、そのような備えは見つからないだろう。すぐに火を起こせる唯一の手段と唯一の

「我々が利用できる真水は、あの壁の中に隠されたままだ」とオディーノは言い、修道院の南門の方を指差した。「そして、ここからマウンテンマウスまでの最後の食料は、私が厨房の備蓄品をすべて集めたので、今は寮の中に隠してある。」

ラザルスは西の方角を見た。「マウンテンマウスは洞窟だ。あそこだ」と彼は言い、暗い地平線の方向を指さした。

「その通りだ」とオディーノは答えた。「そして、今はそこにいなければならない。太陽から身を守るために。洞窟のことは覚えているだろう？」

「ええ、そうです。父がマウンテンマウスについて話してくれました。そしてニコラス修道士が私に説明してくれたのですが、彼がそれを見つけた方法。」

「たった半晩で、私をまさにそこへ導けるとでも思っているのですか？」

「ああ、もちろん！ご案内できますよ！ニコラス修道士はこう言っていました。『少しも道に迷わず、正確に西へ進んでいけば、まっすぐ山の入り口に着く』と。私は決して道に迷いません。きっとご納得いただけるでしょう。」

オディーノは安堵のため息をついた。ラザロには、おそらく生きている人間の中で誰よりも優れた、神業のような方向感覚があることをよく知っていた。それは、渡り鳥の方向感覚に匹敵するほど正確だった。そして、たとえ何晩も西の道を歩かざるを得ない状況に追い込まれたとしても、ラザロが西の道からほんの少しも逸れることはないだろうと確信していた。オディーノは修道院の方を向き、「ようやく、これは我々に有利に働くかもしれない。兵士たちが気を取られている間に、食料を取りに行こう」と呟いた。

「だが、兵士たちは我々を捕まえるだろう！」ラザロはオディーノのロープを掴みながら叫んだ。

「いや」僧侶はそう答えると、少年の手を振り払いながら振り返った。「私は一人で行かなければならない。お前が捕まる危険を冒すわけにはいかないのだ。」

ラザロは岩を軽く叩いた。「では、私はここに、この岩の後ろに留まるべきなのか？」

オディーノは首を横に振った。「だめだ。ここに留まれば、巡回中の兵士に見つかるかもしれない。それに、私が遅れたら、日差しを避ける時間がなくなってしまうかもしれない。」オディーノは東の方角を見て、明るく膨らんだ月をじっと見つめた。

ラザルスは墓地の西側の暗い端を搜索した後、オディーノの方を振り返った。「では、私はどこに隠ればいいのか？」

「ここじゃない。山の入り口だ」とオディーノは答えた。「旅は半晩で済む。」

「それは君の味方だ。そして、君はそれを見つける方法を知っているだろう？」

ラザルスはうなだれた。「そうかもしれない。ニコラスが真実を語っているなら、だが…」

「ニコラスの言うことは本当だ、ラザロ。彼は君の父と私にマウンテンマウスを見せてくれた。彼がその名前をつけた時、私たちはそこにいたんだ。」

「だが、我々是一緒に出発すべきだ。君と私で。そして明日、君は修道院に戻って食料を調達してきてくれるだろう？」

「いや、ラザロ。旅は険しいものだ。多くの丘や谷を越えなければならない。」オディーノは汗ばんだ額を袖で拭った。彼は震える手を

彼は腹痛を訴え、首を横に振った。「往復歩いて行くのは無理だ。食料の重い袋を背負っていなくても、自分自身にとって重荷だ。もし極寒で死なずに、君の言うように明日戻れば、

「夜の騒ぎが収まり、門番が持ち場に戻った後、どうやって兵士たちの目をかいくぐればいいんだ？」オディーノは岩の向こう、修道院の壁越しに指をさした。「ほら、大聖堂のてっぺんに、あの新しい枢機卿が門石から解き放ったものを見てごらん。」ラザロは教会の屋根と尖塔を見上げた。上部は今や、形のない幻影の群れが集まって光に照らされていた。オディーノは続けた。「あれらは一種の精霊で、私は確信している。

彼らはただ派手なパフォーマンスで私たちを楽しませるつもりはない。いや、彼らの存在と動きは、この修道院にさらに大きな悪がこれから起こることを私に示唆している。それが何なのかは分からないが、今この瞬間にも、彼らは精霊の軍勢として集結しているように見える。

屋根の彫像の間で、彼らがどのように動き、列をなして集まるか見てごらん。一つだけ確かなことがある、坊や。彼らが組織化しようとする頃には、我々はここにいないだろう。

だから、兵士たちが彼らや地下墓地から立ち上る新たな煙に気を取られている今こそ、行動を起こさなければならない。食料を調達するには今が絶好の機会だ。

「奴らはお前を捕まえるだろう 必ず捕まえる」とラザロは再び修道士のローブを引っ張りながら不満を漏らした。

オディーノは腰に手を当て、後ろにもたれかかった。「仮に私が捕まったとしよう。捕らえられた修道士をどうするつもりだ？ 許しを請うのか？ ラザロよ、兵士でさえ主を敬うのだ。私が聖職者であり、神のしもべであるという理由だけで、彼らは私に何もできないだろう。さて、最も重要なことは、君は

夕暮れが明ける前に、マウンテンマウスの安全な場所までたどり着いてください。そこで会いましょう。規定に従って。」

ラザロはオディーノのローブを放し、頭を垂れた。

「それに」とオディーノは付け加えた。「もし奴らが私を捕まえようとしたら、ヤギで全員叩きのめして追い払ってやる！」

ラザロは顔を上げて首を横に振った。少年の仮面の下に、かすかな笑みが隠されているように感じた。しかし、少年は彼から顔を背け、遠くを見つめた。

オディーノはラザロの前にひざまずき、彼の肩に手を置いた。「お前には、父上と同じように強くあってほしい。お前は父上の十字架を背負っている。そして、父上を誇りに思わせるだろう、そうだろう？」

「そうしよう、修道士よ」とラザロはぶつぶつ言った。

オディーノは兵士の痕跡がないか敷地内を偵察した。「そして、あなたは正確に西へ歩いて行けると確信しているのですか？」

「できますよ」とラザロは断言した。「でも、修道士様はもうご存知でしょう」彼の声には、かすかな苛立ちが滲んでいた。

「ああ、わかってるよ。」オディーノは彼の肩を軽く叩き、西を指さした。「ここからだ、

夕方の半分は正確に西へ進みなさい。そうすればマウンテンマウスはあなたのものです。道中、人目に触れたり、声を聞かれたりしてはならない。少しも道から外れてはならない。あなたの進路は決して迷うな、さもないと知らず知らずのうちに山を迂回してしまうぞ。すべてを避け、洞窟へと続くまっすぐな狭い道だけを残して進め。私の気持ちはわかるか？

「はい、修道士様。」

「もし夜明け前に洞窟にたどり着けなかったら、必ず日差しを遮らなければならない。せめて穴を掘って、土と石で身を埋めろ。」オディーノは身を乗り出し、ラザロの肩を強く揺さぶった。

「これは非常に重要なことだ、ラザロ！太陽がお前を殺す！お前は死ぬ！私はそれを見たのだ。それは醜く苦痛に満ちた死だ！お前が叫び声を上げている間に、肉体は完全に石になってしまう！そして、それを元に戻すことはできない。太陽がお前の死因となるのだ、ラザロ。その後、生きることはない。」

ラザロは何も言わなかった。オディーノは彼を解放した。修道士にとって、少年の沈黙と硬直した態度は、十分な返答のように思えた。

「さあ、ここから立ち去れ。残っているのは悪だけだ。決して振り返るな。どんな理由があってもひるむな。」オディーノは少年のローブを整え、再び周囲を見回してから、少年を軽く押して進ませた。「私を捕まえたのか？」

「はい、修道士様。」

ラザロは黒い西の地平線に向かって歩き、まっすぐ前を見つめながら「あなたはもうすぐ私の後を追ってくるのですか？今晚に？」と呼びかけた。彼の声は震えていた。

「主の御許しがあれば、明日の早朝には山の口で再会できるだろう」とオディーノは彼に断言した。「揺るぎない信仰と固い決意によって、お前はこれから待ち受ける試練を乗り越えるのだ。ラザロよ、お前はもう一人前の男だ。父の息子であり、父の重荷と祝福をすべて背負っている。気を散らしたり、誘惑に負けたり、混乱したりしてはならない。自分の道を外れてはならない。お前は今やイワンなのだ。さあ、行け！そして、足元には静かにしている！」

少年は肩を固くして墓地の奥へと進んでいった。オディーノは遠くから、ローブをまとった人影が夜の闇に溶け込んでいくのを見守っていた。やがて、その姿は近くの谷の影の中に消えていった。しばらくして、西風が田園地帯を吹き抜けた。オディーノは少年が十分に遠くまで行ったと確信した時、ようやく岩に身を預けた。

彼の足元では、月明かりに照らされた涙が石の表面に染み込んでいた。オディーノはイワンのために泣いた。イワンは怯えるラザロのために泣くことができなかったからだ。ラザロのために泣いた。ラザロは、まだなりたいと願う「イワン」のふりをしてきたからだ。そして、自分自身のために泣いた。イワンがラザロにとってそうであったように、自分は決して「イワン」にはなれないからだ。

ああ、その孤独の中で、オディーノは崩れ落ち、丸い岩の上に倒れた太った僧侶のように感じ、自分はただの無益な塵芥のような人間であり、何かの巨大で恐ろしい洪水に圧倒され、溺れていくのだと感じた。

激しい空虚感と切望 長い間死んで耳を貸さない人々がひしめく広大な修道院の墓地の真ん中で、秘めた悲しみに泣き叫び、喘ぎ続ける。

[第7章終了]



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~